



麻生路郎主宰

# 川柳雑誌



八月特輯號

# 海へ!

東洋一  
大毎主催

## 濱寺

遠浅の  
關中主催

## 大濱

清澄の  
家族向

## 高師濱

モダン海濱村

## 二色濱

夏知らぬ

# 避暑

は

# 高野山

大阪難波より二時間餘

蚊のみのない關西一の避暑地

海拔三千尺、大阪より約十度涼しい

宿坊一萬五千人收容、林間學舎、ハイキング

割引 難波より 三円半 (七、八月中)



# 南海電車



近  
作

麻  
生  
路  
郎

愛は濃まやかサンドキツチを運ぶ

父と子のダブルベットをのぞかれる

ひとりゐれば蜘蛛の子にさへ気がうごく

一錢の瓦斯もうれしい父と子よ

諦めた暮らしママちゃんアツバツバ



# 川柳雜誌第十二卷 第八號 目次

文苑

僕の手帖

麻生路郎(四)

武玉川二篇研究(十六)

梅本秋の屋  
森東魚(三)  
蛙子省二(三)

明治以後の川柳年表(六)

西島丸(三)

川柳指導講座(二)

川上三太郎(二)

評月街の高臺

艸樂、春秋、汀柳(四)

有閑の瞳

品川陳居(三)

當世不通漫談(一)

梅本塵山(五)

四國遍路(其三)

酒井大樓(五)

ア・ラ・カルテ

受賣如件……………山川花戀坊(五八)  
街に住めば……………高橋かほる(六〇)  
柳友の激勵……………平田 榕雨(六六)  
伸びる伯耆……………三嶋 美笑(六〇)

笑つてイ、か泣いてイ、か……………前田五健(五九)  
首を喰ふ……………吉田 水車(六〇)  
川柳の叔父……………平井與三郎(六六)

生れた家を語る

(四)



路郎、新水、柳次、綠之助、史呂、みつる、山雨樓、青兒、華水、春光、閑路、夕鐘、與三郎、没食子、翠夢、春秋、悟郎、承春、汀柳、鮎美、白峯、夢裡、艸樂、明珠、いわな、山月、鐵洲、遊舟、祥月、喜由、竹楓、友帆、幸捐、かほる、機見女、九天、啞人、丹路、水車

創作

近作 麻生路郎選 (一)

近作 柳樽 麻生路郎選 (六)

川柳塔 麻生路郎選 (七)

粒々集 長崎柳秀選 (三)

日本名所名物川柳 (東京の卷三) 前田雀郎選 (五)

一路集 アパート 住田亂耽選 (六)

柳界展望 中島鐵洲選 (六)

各地柳壇 路郎、艸樂、汀柳整理 (六)

川柳二十日會 艸樂、與三郎、機見女記 川柳書架 (七)

川柳家の戸籍調 綠 雨 (六)

本社關係の人々 (七) 編輯の窓 汀柳 (七)

表紙 畫 きよし、鳥平、宰二郎、しげを、路郎、合作 表紙題字 楢重



## 川柳と笑ひ

『文藝春秋』の七月特別號に、新居格氏が夢聲、司郎、綠波、エンタツ、エノケン等の笑ひを製造する人達の事を面白く書いてゐられる。川柳は笑ひの文學だとさへ云はれてゐるが、今日の川柳には笑ひが餘程稀薄になつてゐる。この事に就ては私は度々書いたり、喋つたりしてゐる筈である。川柳に發見される笑ひは、多岐多様で、なか／＼深刻で、涙で裏打された句も随分ある。所謂泣き笑ひの句もある。一度斯うした句を抜いて新居格氏あたりに見て貰ひたいと思ふ。新居格氏は大阪人の笑ひに就

# 僕の 手帖

麻生路郎

て語る資格は無い。極く單純に上ツ面だけ見た批評をされてゐる。この事に就ては一度ゆつくり書いて見たい。

川柳位、その時代々々のアトモスフエアがハツキリ出てゐるものはない。だから今日の川柳に笑ひが稀薄なものも無理のないことではあるが、今の世には今の世らしい複雑な笑ひの存することも否めない。そこを見通してはいけない。團十郎俄や曾我廼家あたりの低度の笑ひは笑ひらしい笑ひではない。川柳家がいつまでもそんな笑ひを取扱つて、笑ひの文學だと云はれてゐるとすれば、それは川柳家の恥辱である。我々は既に漫談家や漫才師の語る程度の笑ひや言葉の持つ滑稽味位に頸を外づして

ゐるのではない。

しかし、若し高度の笑ひ、複雑な笑ひが、川柳如に於て特に光を放つとしたら、川柳の要素として笑ひを捨て難いものの一つとすることに異存はないであらう。

### 塊人一派の脱退

番傘がわれて、事務所が水府君のそこへ移つた。塊人一派は番傘の痛であつただけに、水府君としてはやりよくなつたとも云へる。そこへ南北君が戻つたので、今後の番傘は反つて番傘らしくなるだらう。これで昔の番傘型に戻したら、もつと番傘らしくなるかも知れない。

塊人一派の脱退は腫物が潰れたやうなもので頗ぶる自然である。どちらかと云へば潰れ方が遅かつたとも云へる。しかし番傘から脱退することは可成の勇氣を要したことと思ふ。今後何處まで伸びるか、大阪柳壇にとつて興味ある問題である。

### 柳誌の興廢

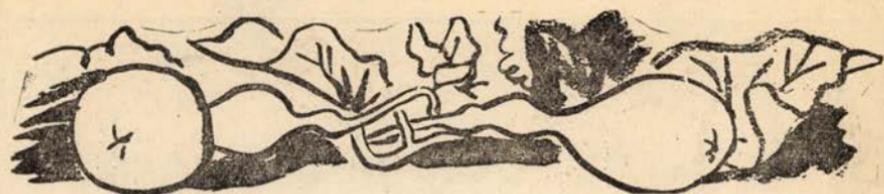
ジツと観てゐると柳誌の興廢はなか／＼激しい。近來東都の柳誌はおしなべて淋びしくなつた。「きやり」などはもつと大きくなつてよかりさうに思ふが一寸足踏みを

した観がある。「川柳人」も劍氏遊いては權威がない。

「川柳研究」も三太郎氏が忙しいので伸びさうで伸びない。「むさしの」も遅々たり矣である。その他も似たりよつたりと云へやう。この際二三合同して、ウンといふ雑誌を出した方が柳界を裨益するだらうと思ふが、さうこちらの注文通りにはなか／＼ならないものである。

京都にしても、随分と雑誌 出るが、これ又なか／＼伸びない。「川柳街」出で、一寸眼鼻がついたやうな氣がしてゐたが、いつの間にか後しざりをしてしまつた。これなどは惜しいと思ふ。御隠居然としてゐた「京」が却つて間口をひろげて來たなどは、何處までも京都は老舗で行くらしい。新進が寄つて出す雑誌は次から次へと出るには出るが、熱はあつても力が足りない。金もないのに商賣をはじめたやうなもので、暫くすると店を閉めるこゝでも云ひ得るのは、お互ひに辛棒仕合つて、もつと力強い雑誌を出して欲しいのである。

例を東京と京都にとつて、甚だ禮を缺いた點はお容しが願ひたい。要は合同の出来るものは合同して力強い存在となつて欲しいのである。各地に主義主張の違ふ一二の雑誌の生ゐることはいいが、三人寄れば或雑誌を出してその地の柳界を溷濁沈倫させることは考ふべきであらう。



# 近作柳樽

路郎選

龍膽があつて淋しい療養所

眞晝まの海を見てゐるピルの窓

雨だれの音から金の夢つゞく

絶對安靜眞上でカラス鳴いてゐる

授業料の銅貨が耻をかいてゐる

團服で常の話に京訛り

父として怒つてもゐるチンドン屋

戀人の腹におさまるソーダ水

ひとり居の聖者のこゝろともなりぬ

榮轉へ車輪の音もこゝろよき

ハモニカを吹くさるまたがよごれてゐる

前垂で手を拭きたのみたい用事

盛ヶ池

万太郎

大坂

大同門

尾崎

観月

同 同 同 同 同 同 同 同 同





新婚の友に

祖母の法事

釣革にならんで女はゞからす  
 茄子を買ふことも嬉しき二人にて  
 珠數もてばかたき心のひとゞきよ  
 散髪屋待たす権利を持つ如し  
 肩のこる氣持家内の愚痴を聞く  
 應接間大きいものに勝てぬとこ

日動入社

鞆と僕とつかれてかへる  
 友達に警官がゐておそれられ  
 演説はたけなわ巡査頃の紐  
 江戸辯と大阪辯で旅役者  
 駒鳥を飼つて餘儀ない朝を起き  
 歌になる戀あり詩人髭が延び  
 酒吞んでオイあきらめろ諦めろ  
 糸通すだけにわざわざ椽へ立ち  
 牛乳の車の音を子が覺へ

大阪

水客

同

高知

同 同 珍景

同 同

今給

同 曉童

大阪

同 いの助

同

同 世間音

同

同 墨洲

高知

同 梨生



言譯をする妓の眉はよく動き  
 亡き父の銀側動くには動き  
 子煩惱電氣の位置が氣に入らず  
 損得を忘れて耳をほぜつて居  
 凡人と生れ食ふには事かゝす  
 友訪へば新婦の酌の驕やかさ  
 罪線は買ひの憲法であつたれど  
 花嫁に踏切の貨車長いこと  
 くだかれて女給はジャズをかけに行く  
 塵箱の塵のぞかして船場暮れ  
 オルガンの教會雨の窓を開け  
 生活へ顔の形も變るなり  
 一人咳けば私も咳が出るんです  
 恢復期ベットの花の水を代へ  
 マネキンの誰にもなく笑ひかけ  
 腫物に似たる會社で齡をと  
 ちと寄附をしてゐて世間信じさせ  
 お互にむしをころして今日も無事

名古屋

同 世香

神戸

同 勝太郎

東京

同 不二號

同

同 無鐵砲

大阪

同 天國

養ヶ池

同 まさる

同

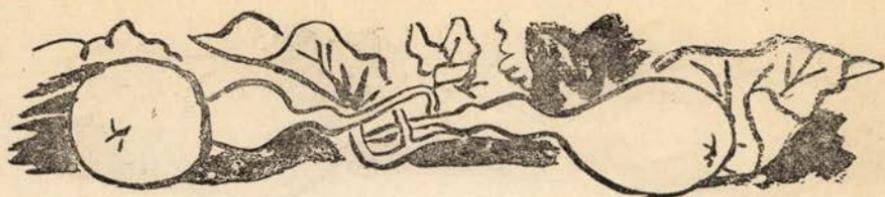
同 としを

大阪

同 沐天

同

同 菊路



運命とさよればいつそ氣が安く  
 猿股の紐がとけない貫い風呂  
 食堂の朝盛花の疲れよう  
 上役の咳事務室を硬くさせ  
 保険金養子の運にされて居る  
 死んでから無性にほめて居る弔詞  
 背をむけた女いつしか泣いて居た  
 病人と思ひたくない酒があり  
 童話へ十年前の我れになり  
 女得ぢきに働き口があり  
 貞操料残りすくなくなるばかり  
 たわむれのくちづけそれも春だもの  
 放浪のある日蛙の子は蛙  
 一日を祈る姿のうがひ水  
 交番を許されて出て雲の峰  
 父らしく今日はのら着で子をいただき  
 肩巾は君の心を表はして  
 はづかしい靴で靴屋へ用が出来

松江

長野

札幌

千里山

金澤

今治

大阪

東京

治

同 庄 介

同 柳 兒

同 非常 兒

同 柳

同 今 雨

同 蛇之助

同 阿伽陀

同 茵草女

同 同

同 曉 童



植木屋はすぐに忘れる名で教へ  
 月給と月賦に尖る神經だ  
 二階借夜店の品で揃ふなり  
 夏祭ふつと賣られた娘を思ひ  
 混み入つた話ビールの泡が消え  
 經驗があるなと思ふ話ぶり  
 焦らだちをわが家の風呂でとりもどし  
 ぬかるみの小路母子へ虹が立ち  
 嚴としてトラツク朝の位置に居り  
 眞に受けた返事をすれば座興にて  
 宗教の話へ無口が言ひ過る  
 問題を起した人に歌が詠め  
 御婦人へ禮儀を盡しあなどられ  
 盛り場へ出てそれからの當が無し  
 終點の近くでたゞくコムパクト  
 つんのめる子が叱られる懐手  
 運のない眼へ懸賞の記事ばかり  
 それからは馴染世帯の事ばかり

竹原

大阪

大阪

向

神戸

同

大阪

秋田

同 文庫  
 同 醉芳  
 同 利生  
 同 晴夫  
 同 吉左右  
 同 朝雨  
 同 花鳥  
 同 寛水  
 同 馬占山





愛の巢へ固き糊着た母が来る  
山車一つ商店街をぬけきれず  
金のあるうちは誘ふて呉れるなり

笙人君長女出産一句

明眸の片鱗見せて女の子  
ひと時雨あつさり仕舞ふ紙芝居  
夢みたり欠伸をしたり二十七  
雨戸閉め又一日がすみました  
退院へシネマも見よう釣もしよう  
初夏の堤は繭の値の話です  
ハイキングとつて呉れると枇杷が熟れ  
つれ出してこの絶景で振られたり  
信じてた丈けに怒りがのたうつて  
金が無い同志ぶらつき草臥れる  
華かな想ひをひろげ桑を刻む  
小さな虫ながら昔を持ちるたり  
葬式を眞半分に切った巡査の手  
垣根越風呂の空いたが傳へられ

神戶

同 蘇堂

同

久米雄

同

同 天秋

巖川

同 朴泉

今治

同 一風

同

同 輝親

長野

同 有爲郎

松江

同 圭之介

同



Y 氏令嬢を悼む

いまと云ふ酸素の泡を見つめる  
 頬紅まで刷いてお別れの看護婦  
 曲乗の形で出前はカーブする  
 悠然と晝の屑屋が呑みに来る

陽當りのいゝ病室

スリツバの音に影引く窓硝子  
 紺碧の空に視飽きて職捜し  
 自家用へはつきりブルの顔見たり  
 厚司着てくるカフェーは落ちつけず  
 悪運が強く養子にはまり込み  
 川上は白粉臭い人の聲  
 見すかさねたたくない門の小づくるひ  
 帯解いて乳のふくらみソツト撫で  
 一ともうけする満洲でリヨヒオクレ  
 本常の年が云われぬ厚化粧  
 無代進呈附物を買へと来る  
 流線型背中が曲りそうに乗り

大阪

木圭

竹原

同承春

同

呂烈

奈良

同青柿

大和

同翠峯

竹原

同都子

同

同芳泉

尼崎

同正柳



ニツケルの音變りなきレヂスタ

病篤き友

頬骨にとまつた蠅をおうてやる  
 それでこそ父の子となる歟を振り

妹の死

あゝついに死といふ事實を前にする  
 女房と合す力だ知れてゐる  
 眠る泣く飲んでるだけの兒の一日  
 髪刈つて歸れば初夏の風が撫で  
 意地つばり涙は隠しおほせまい  
 手相見にこそばゆいとこ當てられる  
 順々に病んで家相の事に觸れ  
 無頼漢國民性は忘れてす  
 雨蛙からに似合ぬ聲を出し  
 子を連れて歩けば昨日も明日もなし  
 あさましく夜の世界に呼吸しぬ  
 行詰るそのはけ口に酒があり  
 戀なんか知りまへんわと純喫茶

盤ヶ池

六 朗

加賀

同 義風子

同

秀 峰

同

小 百姓

大坂

笙 人

今治

龍 鳳

名古屋

伶 人

神戸

木 履

東京

丹 三郎

西宮

三 代吉

兵庫

ベンペン草

大坂

歌 都路

東京

菊 子

大坂

雅 星

同

清 彦





一合の酒買ひにやる共隊ぎ  
 チユリツブかすかに蜂の羽音して  
 仲人が裾を案じる寫眞室  
 水あそびする子の袖をまげてやり  
 ボマードは安物らしい御用聞き  
 エノケンは来るし勉強出来難し  
 暑中御見舞女給に惜しい筆のあと  
 晴天よプロレタリアのほゝ笑みよ  
 母親の豫感濱へ駈けつける  
 年下の叔母の乳房へ眼をそらし  
 アマチユアゝ夏の星座兒を集め  
 来る夏へ酒場あらたな色を替へ  
 盗電へ只あやまるの一手なり  
 見晴しで小さく動く貨物驛  
 無風帯體呉となりくる汗を見る  
 紙芝居無中になつて子を泣かし  
 菖蒲湯にわが健康の湯がこぼれ

妹とわかれて

同	大阪	大坂	大阪	同	松江	同	大阪	鳥取	名古屋	松江	鳥取	大阪				
正一	正明	好郎	史槩	美津女	やすを	水樓	滋外人	逸園	幸明	美代路	寒草	秀峰	東前草	章美	喬士	大佛



何もかも妹の姿のにもほひする  
アバートの暮しにも似し紅雀

玉造温泉にて

遠出鬻いでゆの朝を爪楊枝

結婚

何となく勝手の違ふ嬉しさだ

五月七日紀州九度山眞田庵にて幸村忌を催す

此の町に機屋殖えたり幸村忌  
よく話す見合の娘の眉細し

一人立てば一人に星のさゆる夜

燈火管制そのまゝに寝て仕舞ひ

靴の音パパと違ふと娘はねむり

茶ばしらのちひさい幸にめしや出る

禁煙へ七日の願がまち切れず

さみだれへ溜息をして靴を履き

弟へ訛をさされてなさぬ仲

美爪術などして看護婦の午後

病床にて

鳥根  
登之池

凡愚  
一更

松江

雛千代

金澤

立帆

奈良

葉魚

大阪

正一

今治

小樓

高松

柳夢

大阪

公子

同

源太

奈良

千蛙

大阪

琴泉

同

つと夢

登之池

まさる





るものこれか。「北條五代記」に「髪をば、びなんせきに鬢を高くつけあげたまへり」と見え、「鹽尻」には「今男女盛に五味子かづらを用ひて髪を固む、これも中世よりせしことぞ云々」と見えてゐる。(藤澤)

五味子の事は梅本さんも申して居られ、又守貞漫稿には詳に載つて居る。

すいかつら寺へ這入ると賣仕廻 (武士)

この句はどう解しますか。頭髮用とした方らしくとれる。

秋の屋 按るに「倭漢三才圖會」の忍冬の解説に、其の粘汁を髪に塗るといふことは無く、五味子の解説には、「其梗浸水取粘汁、塗髪甚佳、俗呼名美軟石」とある故、昔の人は、さねかづら(五味子)を誤つて、すひかづら(忍冬)と呼び、それを水に浸して粘汁を採り、市中を呼賣したものと想像される。私は實驗してみないが忍冬は水に浸しても粘汁は採れまいと思ふ。

東 魚 Ⅱ すいかつら賣の事は諸説で首肯出來た。「寺へ」の句は、寺では髪に用ひる人が少いから、僅に賣残つたものを、寺小性などに賣仕舞にする、とでも解すれば筋がたゞぬ事もないやうに思はれる。

省 Ⅱ 尙調査するに藥風呂に用ひしと云ふ。濕瘡、腰痛、打身、貧血に効ありと。

(471) 膝抱てうらみの泪 あつく也

秋の屋 Ⅱ 膝抱いてといふは、他人の膝を抱くのではなく、自

己の膝を抱いて、怨恨の泪に咽ぶやうだが、いづれ戀の葛藤と想はれる。

東 魚 Ⅱ 男の膝へ顔を伏して、泣き恨む方ではなからうか。

省 Ⅱ 「恨みの泪」は女であらう。膝は相手の男と思ふ。

(472) 伊達を残して戻る奉公

秋の屋 Ⅱ 「伊達を残して戻るとは、御殿女中などが何か一つの規模を残して、仕を致すといふのではない歟。例へば春日局といふ様な人か。

東 魚 Ⅱ 伊達なはで、した様子が、御殿奉公の名残りに、残つてゐると云ふのであらう。

省 Ⅱ さうであらう。流石に御奉公戻りの伊達さが判る。

(473) 辨慶ふたり貰ふ五月雨

秋の屋 Ⅱ 此の辨慶といふのは、端午の兜人形の事であらう。

東 魚 Ⅱ 「辨慶の使かさこで吞んでゐる」が柳多留にある。

省 Ⅱ 「辨慶とあてたに干鱈くりやあがり」

(474) 田は寒く夫婦鳥の口を明

秋の屋 Ⅱ 冬田の荒涼な 全景で、「枯枝に鳥の止りけり」の句と、同王異曲である。

東 魚 Ⅱ 口を明いてゐるといふ描寫に、一層の寒さわびしさを思ふ。

省 Ⅱ 餌を探しても乏しく、口を明けたまま、啼きませぬ

のを見受けるものだ。

(475) 三嶋のもくさ夜斗うれ

秋の屋 京より江戸へ下る旅人が、東海道の三島驛に止つた夜、明日は箱根を越るので、足の三里に灸を据ゑるのであらう

東魚 病氣の三島女郎業にでも、賣れるのではないか(夜と限るのは可笑しいが)

省 二 今踏むた雲から、とんだ三嶋の夜の雨宿り、足の疲れをなほしの艾でなからうが。先きはまだながい。

(476) 我戀の人の戀まで眼に懸り

秋の屋 同病相憐むのであつた。

東魚 戀すれば事毎に神経が細く働くやうになる。人の戀も目に掛かるのは尤である。穿つた句である。

省 二 眼に懸つた以上、大に氣に懸る。

(477) 最う似た顔の出来ル元服

秋の屋 大商店の手代などが、一時に敷入元服すると、自然に似た顔が出来るのであらう。

東魚 忽にして親の面影をつくりになると云ふのではないか。

省 二 私も親に似る方に解してゐた。

(478) 汁粉の使戸も明ぬ家

秋の屋 如何なる場合である歟。前句が無ければ判明しない  
東魚 雪の夜などの凍付いた戸ではないのか。熱い汁粉を振舞ふから、一寸御座れと云ふ場合などか。

(479) 同しはちすの夜着を踏さく

秋の屋 一つ袂を兩人で着て寝る故に、つひ足で踏裂くことも有るであらう。「同じ蓮」とあるから、夫婦である。

東魚 さげやすい蓮の葉をも、匂はしてあるやうに思ふ。蓮の葉に上つても、蓮の夜着をふみさくであらう程の中の良さ

と云ふ心持ちではないか。

省 二 (381)「一つはちすのもめる後添」の句解も参照を希ふ。極楽浄土には、夫婦などの私的な區別はないから、同じ蓮

を夫婦や後添の三人で、獨占する事は出来ない、頻りに説いてゐた坊さんがある。私も御尤だと賛成はするが、そうなる

と此句の解釋などに支障も生ずるから、やはり同じ蓮を認めて置きたい。

(480) 紙燭の互りの出来合て濟

秋の屋 紙燭は出来合の物で、前方より豫め作つて置くものではない。

東魚 只、軽味の句。

省 二 確に軽味は教へられる。前句を受けて、よく當てはまるのであらう。

(481) 雁金の棹の先には鈴鹿山

秋の屋 雁金の様とは、雁が長く一列となつて、上空を飛行する状をいふ。

東 魚 鈴鹿山と置いたのは、單に前句によつてあらうか  
省 二 雁金の棹を詠むは句例、「棹の雁行へは雲となり  
にけり」(柳浪)。鈴鹿山でなくとも、夕筑波とか瀬田の橋でも  
通用するから、前句事情ならむ。然し鈴鹿は大寶令制日本三關  
の一つでもあり、鈴鹿は曇るで照り降りて名あり、なんとなう  
句の感じは一層出る氣分がする。

(482) 女房にくれぬ戸板へ夜入道

秋の屋 人の娘を女房にくれと申込んで、拒絶された意趣を  
はらす爲に、戸板にへまむし夜入道を樂書したのである。へま  
むし夜入道とは、片假名のへまムシヨの五字と、草體の入道の  
二字にて、法師の姿を畫に描くをいふ。

東 魚 入道でも樂書さする奴なら、失戀の懊惱などはな  
い。

省 二 入道の句例、「秋風や壁にへまむしよ入道」「一茶」  
平假名の「へへののもへじ」の顔は、今でも見うける事がある。  
ヨ入道は知られぬ青年が多い。「へまムシ入道」もある。

三 養雜記に「奇跡ぞに、わらばでの戯にふがく、へまむしよ入道  
ふるきにや、山の井の望月のかげをふによく似たる哉とちもひあ

わせて

繪に似たるかほやへまむしよはの月 雛屋立團

右正保のむろの吟なるよしへり。されどこのへまむしよは、いと  
ふるくよりいへることならんとおぼし。そのゆゑは青蓮院にへま  
むしよ入道の四百年以前の物なり。その筆者しれず惜むべしと  
遠碧軒隨筆に見えたり。またある筆記に、葉室大納言自畫自贊の  
うつしとて

世の中をらくにへまむしよ入道

あればあるまふなりやそのぶん

なご見えたれば、後世のものともさだめがたし」と。新藤正雄氏  
なる落書蒐集家は、硫酸紙を貼り前年筆で克明に寫し、トレーシ  
ングペーパーに寫直し分類されて居る由。

(483) 看病へ突出してやる忍冬酒

秋の屋 患者に飲ませた忍冬酒の餘りを、看護する者に與へ  
るのである。

東 魚 今なら葡萄酒のおすそわけか。

省 二 忍冬酒は混成酒、忍冬の枝葉汁を用ふるもの、紀州  
弱山源二郎太夫之製とある。攝州の産を良しといふが、濱松名  
物に神谷の忍冬酒があつて、永祿年間の發明だと言つて居る。  
効能は大小腸通利の外治風解熱、貧血等が數へらる。冬を忍ぶ  
この植物の葉は決してすばまないから治風に効あるも道理か。



……A……

單に日本の文學のみでない、西洋のを見ても、親が子をうつした文學は書庫からこぼれる程あるが、子が親をうつした文學はその一割にも満たぬであらう。子を思ふ親の心と親をおもふ子の心とは容は同じらしく見えても、その立場に於てその經過に於て勿論比較し得べき問題ではないが、いまこれを僕が川柳する場合に就て言へば、わが子を川柳する事に比して親を川柳する事は實に難い。その意味で「わが親」といふ題は確かに難題

# 右へ左へ

川柳指導講座「わが親」講評

川上三太郎

である。一般に難題と言へば「物言ふ堂」たとか「船山へ登る」とかいふのを難題だとしてゐるが、實はそんなのは難題でも何でもない。少しアクロバティックに川柳する事の出来る人間なら、その句の可否は兎に角十七字にはまどめられる。本當の難題といふのは「わが親」といふやうなのであらう。僕は先づこの難題に句を寄せられた諸兄の懸命さをよろこぶ

……B……

わが親に似てゐる顔が不足なり  
この句の句語は「不足なり」にある。

ところが何故不足なのだかハッキリしてゐないために、肝腎な句語が邪飛球になつちまつた。この句の失敗は「不足」の説明がないためである。然しそれなら何んな句でも説明がなければいけないのかといふとさうではない。これと意味は違ふが、同じ字を使つた句で

わが顔動物園に似たるあり

といふのがある。これは僕の従弟で高野京雨といふ古い川柳家がつつた十七字であるが、この句の場合の如きは絶対に説明があつてはいけないのである。漫然

と動物園と言つたところに説明以上のものがある。その爲にこの句はユーモアの漂つた句になつてゐるのである。「不足」の作者は入院中であると添書かしてあつた。さういふ場合には「不足」より寧ろ「満足」の方が環境の上から言つても、本當の句が生れはしなかつたか。(句主大阪藤原三男坊君)

#### 別居せる母をとろゝが想はせる

とろろ汁を口にした時フト離れてゐる母親を想つたといふ句である。これは四百子位な短文にするといふ。句材も内容もよく解るのだが、句としてのニュアンスの薄い事が遺憾である。凡そ僕等の眼や耳にうつたへるものゝ中で、たゞ「解る」だけでいゝものがある。たとへば警察の告示だとか蠅捕デーの宣傳文の如きはそれで、「この土手に登るべからず警察署」「憎らしい蠅をみんな捕りませう」で結構なのであるが、句となると尠くとも同じ蠅捕奨励の意味にしても

#### 子を持つて憎らしい蠅怖い蠅

位にしなければいけないのである。前掲の句は、それより勿論濕ひはあるが、然し何だか變哲がない。殊に「とろろ」といふやうな動くもの——とろろでなくともこの場合、うどんでもよささうだし西瓜でも通じるといふこの弱點を、作者はもつとかばはなければならぬ。尠くともその弱點を特長にまで力調ししなければならぬ。それが亦川柳するおもしろさでもある。(句主大阪加藤ライト君)

#### 母さんの顔に大き皺が出来

「大き皺」は「大きな皺」であらう。前號にも言つたが、句を投ずる事はわが娘を嫁にやるのである。家を出る前に幾度も／＼見てやるのが親心ではあるまいか。そしてまたそれが婚家に對する禮儀でもある。投句の脱字はこの意味から言つてわが句を愛さぬ事になり、講評者に禮を缺く事になる。これはこの句主にのみ言ふのではない。必ず投稿は讀み返してからポストに入れる事。その位な事をやつて呉れなければ、忙しい時間を裂いてこれをやつてゐる僕は詰らない。ところ

でこの句であるが、この句はもう一呼吸といふところで止めてしまつた句だ。句材の單純なのに好感が持てるのだが、こゝでおツばなしてしまつたのでは何ともしやうがない。もう一足突込んで作つて欲しい。(句主島根森山さわだ君)

#### かたくな、父だと思ふ日もありぬ

「かたくな」は上のなの字を送らずにかたくな「な」と別になの字を書いて貰ひたい。大概誰でも一度は親父を頑固だなと思ふ事はある。僕だつて思つた。この句はそれを言つたのであらうが、この句には作者の「わざ」がない。「よく作つて呉れて有難う」と恩に着る事が出来ない。何だか初期の石川啄木の上の句だけを讀んでるやうな稚拙の「よさ」でなくつて稚拙の「稚拙さ」だけが残る句である。思ふに作者に、まだ川柳する苦行が足りないらしい。然しスタートをこゝから切る事は大賛成である。眞面目に精進して純情なる川柳研究になる事を望む。(廣島垂柳君)

.....C.....

### 死病にも子らの孝行させた父

これは俳句中最も異様な材料を句にした川柳であつた。但し僕の好みから言つて「子ら」は「子等」「さけた父」は「避けた父」と漢字を使つて欲しかつた。亡くなつた父——それは既に自分が死病であるといふ事を知つてゐたにも拘はらず子供たちに孝行して貰ふ事を避けた父であつた——といふのである。面白いと言つては世の親に對して禮を失するが、まことに興味深い句材である。然しこの句は表現技術の上から言ふと尠からず缺點がある。第一非常にゴツ／＼してゐる。入歯を修繕にやつたあとで煎豆を御馳走になりてゐるやうだ。と言つて字句を更改するにも一寸手の出ない句だ。一つ諸君、これを材料にして作句してみても如何。かなり深刻なものが出来るであらう（句主大阪仙田つと夢君）

.....D.....

最後に先人のわが親の句を少し並べて

見やう。

あれもこれも買うてやりたい父となり番翁子を持つて父の言葉に逆らへず 南海大掃除父の弱さが目立つなり 姫菊二人の父だぞと氣が弱くなり 周魚幕はれるものゝ尊さ母に見る 鐵扇花糸屑の事から母と少し紛め 若葉女世の中におふくろ程のふしあはせ 雉子郎母親の居所知れる炭の音 水府何れも作句の好模範である。尙最近僕の門下生小林平吉が、彼の母親の盲腸炎に際し數句を得た。

母は重態です母の眼を逃れる

母の纏帯車を見てゐる人を嗤ふ

手術臺の上の電燈の忠實

生きてゐる母の血がメスに挑むのである

母よく眠りたまへ氷缺く音です

病室の花よ頼みます妻れた母を

みんな破調である。だが聾々と胸を打つ力の強さが尊い。だが要するに這箇川柳なるもの、これを與へ、これを受くる、即ち川柳する者のみの有す「泉」であり「松風」である。諸君よ、この清冽なる泉を心ゆくまで汲みたまへ、颯々たる松風を心澄むまで聴きたまへ——。

## 純 喫 茶

## 喫 茶 フルーツ

目丁四町礪シ但劍西入北詰北橋齋心

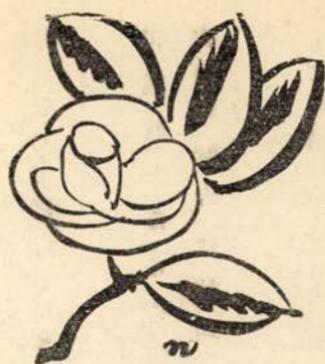
## ル カ イ バ

平野屋フルーツパーラー

戎橋筋電停北 電戎五七九七

平野屋果物店

大阪新波驛前 電戎六一六二



# 川柳塔

路 郎 選

西 田 艸 樂

増 位 汀 柳

人生が冒險さ君株も買へ  
傍聴の耳にも痛い叱りやう  
バスケット都會の男信じきり  
パトロンものはテリヤ吹ゆるなり  
螢狩螢はゐないが君とさゝやく  
人の世の苦に觸れそめて讚美歌する娘  
あの勝負どないでしたと碁へ戻り

かけ持ちの戀も若さの誇かや  
さつばりと別れて悔ひぬ人ありき  
こなになれ粉になれ仇し女たち  
おもひでは紺がすり着て逢ふた日の  
待ちぼうけばかりしてゝ待つ弱さ  
たづねゐるまこと都會にみつからず  
裏町へ漁色の人の足はやし

山本丹路

機械化としてもなか／＼氣が疲れ  
流れきて土地の女を情婦にし  
天の曰く文句を言はず惚れてるよ  
えつさ／＼本を運んで部屋變り  
遣されし者に芳子とお母さん  
もの思はざれば靜かなたばこの火

山本雨迷

エンジンの律動となる汗落ちる  
職工の頬こけゆくをあた／＼めてゐる  
楚々として渚の素足ざんげもなし

生田翠夢

青簾妓とゐるに陽は高し  
夜の蜘蛛女は技巧的に逃げ

橋本綠雨

すだれ越八百屋と話す暑いこと

○ 西村明珠

後とりの息子試験が苦手なり  
春秋氏の長女のぶ子さんを悼む一句

手を引かぬ後姿が淋しそう  
勉強をさせ様として腹が立ち  
女房は俺を忘れた寢像なり  
意見する母は縫ふさへたいざがり  
汗拭いてゐると身體をほめられる  
電話で叱られ會ふて叱られ會社  
縫物の傍で肘枕が話し

朝田新水

知らぬ土地お針師とまでさがり  
ランドセル女中に無理をいふて出る  
逆境の一面識もたよつて見  
慈悲といふ心の奥の手をのぼし

後藤 青兒

損失になれば共同だと云はず  
鹹にする前の榮轉とは何だ  
妾宅は主人々々と云ひたがり  
別々な事考へて夫婦なり  
上役のきめた仕事に歩かされ  
病人もこんなにあるか赤十字  
四十になつて口笛吹くヤモメ

喜多 春秋

子に死なれて 二句

死んだ子に夫婦あやまることばかり  
病室に等級がある亦悲し  
大阪と神戸と続く煙の尾  
おかしくもないに笑うて物が賣れ  
人を戀ひ歩いた夜の屋並みかな

吉田 水車

種痘所は喧嘩でもする構へなり  
雨宿りロマンチックに行かぬなり  
寫真班刺客のやうにしのびより  
マグネツシューム尻ツピリ腰の俄助手  
あ言ふ手もあるかと思ふ差し向ひ  
トラツクのほこり中仙道は枯れ  
市場 没食子

捨鉢になつて酒量を上げてゐる  
嘲笑を後目に實利占めてゐる  
雷雲がしきりに光る生ビール  
夏祭 主客裸で呑んでゐる  
醫者ひとりこの界限で儲けて居  
終極の味方に妻がひとりきり

平井春光

初妻は石鹼くさいシャツを着せ  
箆を引く氣持夕餉のふきん取る  
内職を傍で擴げる趣味の本  
戎橋賣られた躰はこぶなり

みどり丸遭難

悲しみの霧訪れる坂出港

越智紅一郎

娘を賣つて牛買ふ術のありはあり  
ハ、キトク空氣枕を買ふて乗り  
借り電話男の帯がとけてゐる  
暇な醫者將棋相手を待しとき  
子が持てば叩く術あり夏帽子  
さる程にかたふなかつた村小町

奥野禿山

月給の程を着て來る女事務  
散歩ではないと見せてる藥瓶  
金の世につながれて居るアドバルン  
實印を祖父は容易に手放さず  
金五錢仇に使へぬ手内職

曾我部宵明

大過なくとは榮轉が云ふ言葉  
さみしきは茅花の招く驛を降り  
波音のきけるところで病んでゐる  
いつまで娘で居たい田植笠  
醫者の俵の後の夏雲  
してみればやはりおんなはよはいなり  
妻すでに子持となりぬ柄を選り

姫田夕鐘

水谷 鮎美

まごゝろの鎌がひかつてゐる生活  
物干と煙突畫の月さびし  
兒の寝顔笑ふ暇さへない朝よ

大峯登山(六月十三日)

沐浴の一步一步の峯つゞき

青木史呂

知友相ついで結婚

嫁さんを早うもらえと皆貰ひ

静太兄へ

自嘲とは自殺のことと違ふなり

鈴木嘉二兄へ

嬉しさはビールが丁度空になり

中澤 濁水

また醫藥分業論じ盛つてゐる  
バスに揺れ人にもまれてまた遅刻

江戸みつる

病む人に大阪の煙氣にかゝり

彼女には

久方に逢へは仔犬の如くじやれ  
ヨシ／＼と聽いて電話で断はれり  
女へは約束違へず逢ひに行く

宮岡 白峯

留守番にしては大きな握飯  
カルモチンめさましどけいかけておき  
紹介所筆一本で働く氣  
米一斗五升現金にて候  
明日は泣く人等株式取引所

首藤 竹楓

海水着おんなに行儀捨てさせる  
ひるがへる袂の風は日本です

須崎 豆秋

貧しさを猫の顔して笑つて見た  
新郎と新婦にねすみ追はへられ  
友あり金借りに來て以來來す

西 いわを

乳母車皆んな歸つた後をおし  
色街を外れて此處ら暇な店  
屋上で火事の逃場を考へる

平井 與三郎

ガツカリとしたのは親の五十過ぎ

岡崎 祥月

行商の肌身はなさぬマスコツト  
賣れ残る品に眞夏の陽の濃く

大鶴 喜由

人妻にしても潑刺さが欲しい  
法廷の詭辯それでも教師かや  
てもさても復讐的に生きる君  
惚れる程惚れられる程金が慾し

妹尾 變人

お隣りも内も子が泣く日が暮れる  
片方は失業してゐる久しぶり  
世の中がいやになる程惚れて居り  
釘一ツそこがお役所なんですよ

荒井 英賀夫

折一つもらいに父の名で出かけ  
つぶしにもならぬ男と生れきし  
習ふ物習ふて御養子だけになり

植山 九天

水が引く 一句

子を抱いて逃げる支度を笑ひ合ひ  
汗かいて歸るへ葬列つゞくなり

米田まさる

諦めてお經の楮古してゐるなり  
瘦せきつた腕に時計があるのなり

町田 承春

縫臺の端で勉強させてゐる  
激論の後灰皿のものさびし

尼 緑之助

江津にて

郷川に並ぶ灯影の旅愁なる

## 粒々集

長崎 柳秀

給料は外道の夢を捨てさせる  
孝行の出来る頃には子に惱み  
金のないことを云はずに暇がない  
煙草店妹に出来た兒を育て  
雑沓のどれも急がぬ顔もよし  
読み馴れてきた札束は人の金  
聞いて置くだけの返事のたよりなさ  
牛乳の明日から要らぬ忌中札  
弔 句  
寝てをわす姿の浮ぶ母の部屋

# 明治以後の川柳年表

(柳誌柳書の部)

(その六)

西 島 ○ 丸

(書名、誌名)

(發行年月日)

(發行所其他)

雅 俗 新 聞 第廿五號 (明治九年 丙子 月)

東京湯島一の十三神田明神坂可以觀、編集人岡野伊平、月五回位一錢、菊牛和紙七葉、柳樽川柳として一欄あり

洞 海 第一號 (明治十二年戊申 八月五日)

筑前八幡町市外槻田パーセント俱樂部發行、贈寫版

パ ー セ ン ト 第一號 (明治十三年庚戌 十月二十五日)

「洞海」の改題、活字刷行、發行所同じ、二號で終る

鶴 第一號 (明治十四年辛亥 二月日不明)

「パーセント」改題、大正七年五月二號で休刊、川柳鶴會發行、後福岡縣企救郡板橋村槻田パーセント俱樂部發行と戻る異名同所

右の四件は其の後發見したり探知し得たるものゆへ特に追加記入す

響 第一號 (大正二年癸丑 十月二十三日)

毎月二回、翌三年十月廿五日號で休刊、大正九年十一月廿日復活號發刊、以後毎月一回、翌七年七月十日號にて廢刊

か え で 第一號 (同十二年十五日)

伊豫久萬町久保方紅葉會、第三號より「かへで」とす、六號まで發見

く れ な る 第一號 (同 不明)

東京、本所外手町小野澤松男方蓮見平凡が獨力で俳句と川柳を載せた菊半截位のものを出す、「紅」の前身

ぎ お ん 第一號 (大正三年甲寅 二月十五日)

京都・下京區諏訪町松原南京都川柳社、四六判、隔月

新川柳	東開庵句集	第二編	(同 三月五日)
杏林川柳		第二輯	(同 四月三日)
やなぎ		第一號	(同 四月一日)
川柳	「紅」	第一號	(同 五月?)
川柳自在	うき世の裏表	全一冊	(同 六月十三日)
川柳	花山車	第一編	(同 七月五日)
川柳	ごしき	第一號	(同 七月二十日)
川柳	毛槍	第一號	(同 七月二十四日)
徳川文藝類聚	第十一	全一冊	(同 八月二十五日)
菽翠		第一號	(同 九月一日)
復活		第一號	(同 九月八日)
川柳	大	全一冊	(同 九月二十三日)
とんぼ		全一冊	(同 十月十九日)
くまのへそ		第一號	(同 秋)
ツクモ		第一號	(同 十一月十五日)

横濱、東開庵發行、東開庵同人編著

東京、本郷龍岡町朝陽堂、佐瀬世外編

愛媛縣宅和島町横新町南豫川柳社改やなぎ俱樂部發行、四六判  
安の半我、兵頭樂妙子ら主筆、六年八月十二號を出し、廢刊

東京、本所外手町紅俱樂部、初めは「くれなゐ」といひ後に「べに」と書く、大正十二年八月九日十卷五號後休刊らし、四六判

東京、神田錦町文明社、村上浪六著、四六判二一〇頁

東京、京橋濱町花山車發行所、喜音家古蝶編輯、菊半截、隔月發行、大正五年九月第十一輯の後休刊?

伊豫郡、郡中町大字港町郡中川柳社、四六横三六頁、年四回發行

東京、神田元柳原町川柳若柳會、肝煎坂下也奈貴、大正四年七月二日五號を出し休刊? 四六判

東京、京橋圖書刊行會、武玉川、金砂子、猿菟玖波、高天鷲、若夷、獨歩行、万人講、三尺鞭、等を出す、菊五一九頁

東京、京橋采女町川柳菽翠社、平瀧葛雄個人誌、和紙二つ折、八號を出して廢刊

東京、牛込揚場町川柳復活社、三號で廢刊、此後身が「共鳴」  
東京、本郷有朋館、明治廿六年の同書を表紙だけ變へて再版行したるもの

岐阜、木造町水野孤舟發行、大正三年九月廿一日縣下川柳大會の會報、菊半截十六頁

札幌? 「仔熊」の改題、破笈杖の句に、熊の臍一度世界に見せたきり、一號限り? 後「オホツク」となる

香川縣三豊郡觀音寺町上市ツクモ川柳會、三號限休刊、大正六年南柳樟寺川柳會となり「川柳」となつて出る

カ	ラ	ス	第一號	(同十一月)	山口縣大島郡久賀町吉川噺人方鳥會、三號限廢刊、大正四年五月「シツク」と改題して出る
川	柳	幼稚園	第一號	(同十一月)	大連、盤城町大連川柳會、「漣」の改題、大正四年六月十日第七號限其名廢止、翌七月十日第八號より「紅柳」と改題
彩			第一號	(同 不明)	京都、藤本福造氏個人誌、四六半載、彩雲堂カタロクとでも云えへきもの不定期刊行物
壽	(古)	登富貴	第一號	(大正四年乙卯一月一日)	東京、下谷根岸川柳壽社、和紙二つ折、十二月一日第四號を出して休
オ	ホ	ツ	第三號	(同 一月二十日)	札幌區苗穂町竹原方オホツク會、六號位迄、四六判、仔熊より熊の臍、熊の臍、改題してオホツク、「アツシ」の前身
さ	く	らん	第一號	(同 四月十日)	東京、淺草さくらさ會、四六判、翌年一月二の一が出て終らし
猫		柳	第一號	(同 四月二十日)	金澤市西町藪の内北部川柳社、菊判八頁
鶴見花月園新築文藝競技大會句集				(同 四月 月)	一枚刷、今ではよき記念物
川	柳	みどり	第一號	(同 四月 月)	石川縣津幡町字庄、酒井理髮店方十仙會、四六横型十六頁
ア	メ	ン	第一報	(同 五月 月)	近藤鈴ン坊個人誌、大正七年二月第十一號を出し廢刊
シ		ズ	第一號	(同 五月 月)	伊豫郡中町北村方百日紅社、「カラス」の改題、紙一枚で出す
芝		蘭	第一號	(同 六月一日)	福島縣川柳芝園會吉成劍突坊騰煎、二號まで石版刷、三號より騰寫版、二十號を出して廢刊
番		茶	第一號	(同 四月、六月)	伊豫、治香茶會、四六横綴、第三號限り廢刊
紅柳(幼稚園改題)			第一號	(同 七月十日)	大連市盤城町大連川柳會、幼稚園八號に當る、四六判十六頁石版大正六年廿一號を出して休刊
木	や	り	第一	(同 七月 月)	花山車第七輯附錄、厚紙二つ折、大正五年一月花山車第九輯附錄として( )か出てゐる
狂句に現れたる兒童			全一冊	(同 八月三十日)	巖谷小皮述、東京本郷西片町兒童書院、兒童研究第十九卷第一號所載の別刷「櫻櫻」の「玉川」が種

雪 第一號 (同 八月一日)

大阪市北區上福島一の十二麻生路郎編輯發行、半年で一巻、大正五年十一月廿五日第三卷第五號で休

日 東 文 藝 句 集 (同 九月十二日)

一枚刷

せ ん し 號不明 (同 十月一日)

京都車屋町二條南入後藤染司堂發行、中型八頁

大 正 新 川 柳 大 全 (同 十二月五日)

東京淺草馬道淺田方大正新川柳大全刊行部、菊半横綴八四頁大正川柳四、號までの中より二千句位を抜萃

川 柳 第一號 (同 末 詳)

宇和島での發行

川 柳 天 の 聲 (同 末 詳)

菊半截和厚紙、四頁、發行所等不記、自大正四年六月至同年十二月日本及日本人所載川柳今併成一綴、と中に記す

晴 第一號 (同 三月七日)

京都、佛光寺岩上西入暗礁詩社、菊半四頁、水葉歌根緒、池田劉洲、二人のもの

文 藝 叢 誌 第一號 (同 三月十五日)

東京、四谷右京町文藝社、四六判、四八頁矢野きん坊編輯、二號から「白羽」となる、一號きり

白 羽 第二號 (同 四月十五日)

發行所右同斷、菊判廿八頁、文藝叢誌の改題、從て號數踏襲、同年十二月十五日第十號を出して休刊

か さ さ ぎ 初 編 (同 四月五日)

岡山市大字門田屋敷七六岡山川柳社、河野鐵羅漢編輯、二編は六月十日岡山市下四川町、三十六灘吟社となる、廢刊期不明

黄 白 第一號 (同 五月五日)

東京、赤坂傳馬町黄白社、五味茶童個人誌、菊判卅二頁、二號七月七日、三號九月九日、四號十一月十一日で終、翌元旦再刊

彗 星 第一號 (同 五月十日)

東京、日本橋田所町川柳五星會、四六版八頁、大正六年五月五日第二卷五月號、十一冊を生し休刊

青桐吟社第一回川柳會會報 (同 六月十九日)

東京、京橋青桐吟社、四六判二枚折

川 柳 吉 原 志 全一冊 (同 六月二十八日)

東京、牛込白銀町育英書院、佐々醒雪西原柳雨共著、四六横綴二八〇頁、昭和二年春陽堂より訂増補再刊

類 題 川 柳 名 句 集 全一冊 (同 六月二十九日)

東京、京橋博愛館、佐藤紫絃編、この書同十三年四月に神田三星社、同十四年七月に淺草岡村書店より再出



# 有閑の瞳

品川陣居

柳壇は無風帯だといふ、意味するところは複雑であるけれども、何か問題になる提案の缺乏といふことであるらしい。

柳壇に理論がない評論がないといふ聲を聴くこと久しいものがある、がこれも莫然たる聲であつて、一體何を要求してゐるのか、それさへはつきりしない場合が多い。——何か指導精神を求めてゐる、といふことは感知される、だがその指導原理とする柳論といふやうなもの、今のところ或る一部の指導者の好みが主になつてゐて、それ自身に方向がないから、追隨する側によつてみれば渾沌たることに於て變りがない。

近來は「川柳家」の内容が擴充して來たので、従つて川柳の内容も豊富になり、明かに昭和川柳といふものに或る高さが認識されることは事實である。それは在來の川柳には全然無かつたもので、極言すればこゝ數年、否こゝ一二年の現象であるといつても過言ではないであらう。

かゝるインテリゲンチヤの川柳への參與が、今日川柳の水準を高めて來たこと否定出來ないが、これとてもインテリゲンチヤそれ自身が川柳に對する態度で決定される問題で、若しインテリゲンチヤが何か自己を逃避するといふ氣持が動いてゐる間は、一つの確定した存在を川柳に主張することは困難である。この點をよく川上三太郎氏は懸念して彼等に一種の宣誓をなさしめてゐられるが、たしかにインテリゲンチヤの川柳的關心にはさうした危険性を持つてゐることは事實である。

——「今、川柳に對して自分はスランプに陥つてゐる、しばらく川柳から離れてゐたい」こんな言葉を偶々インテリ川柳家から聞くことがある。それは彼等にとつて必ずしも銜ひではなく、まつたくどうしようもない氣持の表白である。ところがそれは心配したことはなく、いつの間にか川柳心を復活さしてチヤンチヤン作句してゐる。つまり自身で自身がコントロール出

來ないのである。名ピツチャイが打球にコントロールをつけるやうになるのが、監督の頭腦にあるやうに、かうしたインテリ川柳家をリードする先輩の存在は確かに必要である。約言すれば彼等をして川柳に飽きさせないやうにすること、これが今日の先輩・大家の任務ではないかとおもふ。

たゞこゝに肝心なことは、インテリ川柳家が必ずしも先輩、大家の實力に信頼してゐるかどうかといふことである。單なる句語の模倣を是れ事としてゐるやうな人たちで彼等がないだけに、若し先輩、大家が自身の色で彼等を染め上げようとしても無駄である。かういふ點で本誌の路郎先生や川上三太郎氏はよく骨を心得てゐられるのである。その證明は「川柳雜誌」乃至「川柳研究」の同人の顔振れを見れば判ることである。

いとしみのひたいかなしむ夜の枕  
風はぐちとなり地を拂ひつゝ過ぎん  
青空の下行く鼻の乾きかな  
いら立てば馬糞を卷いた風が過ぎ  
へつらへば蜻蛉が笑ふなと思ひ  
ドンキホーテの傾向がある朝をゆく  
有閑の瞳なか／＼あなざれず

◇

蒼ざめしむかしことありことに酔ひ  
眼が語る火を生みながら生きる人  
青春の懼れに生きてゐる愉快  
爪 缺 夫 決 断 力 鈍 し  
吸ひつけて九時吸ひつけて四時歸り

墓 句

幻 樹

雨 迷

艸 樂

青 兒

丹 路

冬の燈臺がしるじる晴れてゐる 不 及

網膜に——グレイヤーの球の靜止  
化粧部屋の太陽の黄色い觸手で

これらの句とその作者を、その傘下にもつ麻生路郎氏並に川上三太郎氏に敬意を表したい。

とにかく今世に、性急にはどうにもならない柳壇である。指導者は緩急宜しきリードをなし、作句者各自身の持味を生かして、且つ絶えずお勉強して行きたいものである。

さて——再び柳壇は無風帯だと云ふ、理論がないと云ふ。

だが——問題は、三太郎氏の厲言を藉りれば、もつとみんなが、インテリ作家と謂はれるほどの人たちが、本氣になつて來ればいゝのである。川柳が彼等のイージーな逃避行であつてはいつまでたつても駄目である。

が、しかし川柳といふ短詩形を文壇レヴエルにまで到達せしめようとするならば（そのことが川柳自體にとつて、どういふ効果をもつかといふことは別問題として）インテリ作家と雖も文學的關心の明け暮れを自己の生活にもつことが肝心である。自由律俳句の何とはなしの魅力に惹かれて、單なる誓形の模倣であつてはイミをなさぬものである。

川柳の先輩、大家に絶えざる川柳の關心といふ武器があるやうに、インテリ作家の文學的乃至哲學的教養は必須條件であるもつ／＼文學の修業は、素質の上に磨きをかける難行苦行である。

本稿は小論の意圖のもとに執筆したので理論の不徹底を怖れるが、一とまづ擱筆して他日にゆづる。（六・七）



登記所て買手の下駄がちびてゐる 品子

舛樂Ⅱ通り句に「角屋敷逐には野暮の手に  
移り」と云ふのがある、そう云つた趣きで登

記所に於て買手の風采が至極揚らないのに、  
賣手の方が立派な装りをしてゐる事が、句の  
裏面に含蓄して世相の一面を表現してゐる。

春秋Ⅱ此の買手は伊勢屋か、兎も角も一句  
としてよく纏り過ぎてゐて、恰も型にきつち  
り嵌込んだやうな感じはある。

汀柳Ⅱ作者が女性であると云ふ事が見通  
せない、川柳を作る女性の持つ觀察眼はこゝ、  
までも鋭く表はされてゐる事は、非常に嬉し  
い。

子を抱いてぶざんを足てめくるなり 勝太郎

春秋Ⅱ此の句は、男親をよく表はしてゐて  
その男親の生活状態を思はせて呉れる、私の  
嬉しい句である。併し、めくるなりの「なり」

に就て諸先輩がこれ迄度々問題にもされ、古  
い作家には珍しい問題でもないが、大門氏の  
「出来る子で定石通り弱いなり」のなりと共  
にもう一度「なり」の研究を私は希望する。

俳句の「かな」と同じやうに、この「なり」も中

々に難しい結び語であつて、只下五が下三に  
なつた場合の埋めとしてではならないと思  
ふ。

舛樂Ⅱ僕も一讀春秋氏の、観懐に似たのを  
持つたが、この句が必ずしも男親に限らない  
と思ふ。何故ならば句はそれを断定せしむ  
るものを持つてゐないのでなからうか、譬へ

ば子供が抱き寝入りでもした場合に、下に置  
くと眼をさますので女親でも足で、布團をは  
れてそつと寝かすもしようで、そう云つた場  
合を考へると句に隙があるやうだ。

春秋Ⅱ私はこの句に、表はされた布團を足  
でめくる動作に依つて、店の間かどこかで抱  
いてゐた子が眠つてしまつたので、寢所へ抱  
いて来て寝かせる時の男親を想はせるので  
す。足で、足で、どうしても男親を想はせ  
るのです。

今は今昔は 昔屋敷跡 文庫

舛樂Ⅱこれも想としては、夢畑なにかし殿  
の屋敷跡」と云ふ古い俳句に似たところもあ  
るけれど、そう云つた客観描寫だけではない  
屋敷跡に川柳家らしい感情の動きが出てゐ

て、等が、俳句と違つたところが面白く思  
ふ。

春秋Ⅱ屋敷跡に今昔感を結んだ、あんまり  
新しい着想でもない、こゝ云ふ感じは誰でも  
が狙ふところの作句の、血路としてならば致  
し方もないが、早く我々はこんな境地から脱  
してもつと獨白性のもものに進みたい、大體に

私は句に對する場合その句を味ふ、その句を  
吟味する、又は一句に依つてではなくその作  
家の、作品全體からその作家を評する場合な  
ど、それぞれにはつきり區別したいと思ふ、

句評をしてゐて、作家評になつてゐるのをよ  
く聞いたり讀んだりする、これは街の高臺の  
句評の席上では聊か脱線ではあるが。

一時二時所詮は歸り來るところ 節子

汀柳Ⅱ筆記を願つてゐる、與三郎君の新婦  
節子さんの句であるので、どうかと思ふが、  
歸りの遅い夫を待つてゐる、佗しい妻の心境  
を巧に詠まれてゐる、そしてごんなに遅くな  
つてもきつと歸つて來れる夫への、信賴が

滲み出でゐる、こゝうした境地におかれ乍ら  
も人妻のみのもつ宗教に似た、心強さをも云

ひ盡くされて餘りがある。

舛樂 II 心境も汀柳氏の云われる通りであるが、句全體のりの調子から云つても婦人とは思へない調子が出てゐるところが嬉しい。

舛樂 II 所詮は所詮は歸り來るところ女性、新妻の、恐らく實感であらう、夜更けに夫を待つにしても實感は先人の扱かひ來たつた材料をこんな嬉しい句にして呉れる、平凡でもいかす作り過ぎた厚化粧でも駄目君子危きに近よらず」と一虎穴に入らずば虎子を得ずの間を巧く行く世渡りのやうに作句の秤もごつちへ傾むいても悪い、自分では平均な秤も高い所から見下されると傾むいてゐる、ともかくも難しいものは作句でありその難かしさが我々作句に生きるもの、樂しみである。

犬山にて

一と棹に白帝城はみだれたり 水車

舛樂 II この句川柳味を喧しく云ふ人々にはその川柳味が問題になるかも知れないが一と棹に水影の城がみだれたところ私のとても好きな句である。

舛樂 II 句意は判りすぎる程判る句である。叙景詩としたら叙法に於て推賞する價值がある。

墜落の跡をとんびのあざやかさ 濁水

舛樂 II この句は皮肉を詠んだものであるが、その皮肉は憎しみのない軽さに出てゐるところが作者の老巧さであらう、こう云つた句はごつちかと云へば作者の個性を味ふ丈けで句そのものには取立て、云ふ程の新しいのなほ止むへなからう。

舛樂 II この句皮肉ばかりではなく難破の跡の波の静けさと同じやうにごこかとんびと假名にしたところののんびりとした長閑けさも表はされてゐる、俳人なれば陽の光りとか雲の移りとかを描くであろうところを「鮮やかさ」と、とんびの飛びつぷりを下五に置いた、やつぱり川柳家である。

俗名のまゝで悲しい蜜柑箱 禿山

汀柳 II お寺はんにも拜んで貰へないで蜜柑箱に入れられて野邊葬りされる嬰兒ほんとは闇から闇へ葬られて行くやうな、そしてごん底にある悲しい傷しい生活状態が句を通じてまざく見せられる川柳のもつ可笑

味や皮肉と云つたものよりも、こうした悲しみの充ち溢れた句をものにされた作者の手腕に敬意を表したい。

舛樂 II 悲しいとか嬉しいとか可笑しいとかはその字を使つて表はされれば仕方ない場合のみに限ると普誰かに聞いた、この句俗名のまゝ蜜柑箱だけでも可成りに悲しい。悲しみにも色々あつて一樣でない、それをその周圍なり事件なりを描いて巧みに表はして欲しいとも思ふ。

汀柳 II この場合の「悲しい」は十七字にする爲に埋めた文字ではないと思ふ、舛樂氏の云はれた様に悲しみを悲しいと云はずに云ひ表はすに越した事はないが、この句の悲しいは更に悲しみを深める意味に於いて決して無駄な文字でないと思ふ。

舛樂 II 僕も悲しいと云ふ文字はいくらかイージーゴインケに陥つた感じをしないでもないが、余り大きな傷でもないと思はれる。

舛樂 II そうです、初歩の人々の句ならば勿論こんなことは問題ではない。

忘れたら勝てる病と氣付きたり 浮鬼

舛樂 II 余談に涉りますが、この句を見て感

じたのです、句主は螢ヶ池の人であるが、螢ヶ池の人にこう云つた句の出る事を、私は望んでゐたのです、浮鬼君は親しく面接をしない人ですが、平素句を見てゐると、療養所等に居る人と思へぬ樂觀的な所があつて、川柳を慰安の一つとしてやつてゐる人には、せめて、こう云つた境地を療養の上に役立たせて欲しいのである、勿論句は偽らない境地を詠むべきで、鋭い病人としての悲觀も時には止むをえないけれど、心持ちが、この句主のやうであると頼もしい事だと思ふ、次の句に

この人も病氣探して病む仲間

と云ふのを詠んでゐるが、句主は病氣そのものを一つの氣概をもつて、押さえつけてゐるやうに見えて、特に病を養ふ人にこの句を捧げたく思ふ。

春秋Ⅱついでに喋る。一、或る人に啄木の作品を示したるに「こんなに「あゝ悲しい」「あゝ情けない」と泣いてばかりゐる藝術は駄目だ、と笑つた人があり。二、共に泣いて呉れるのも同情だが「オイしつかりしろ」と肩を叩いて元氣つけて呉れるのも同情である、不幸な螢ヶ池の人々に對して、その取巻き連中がみんな共に泣く同情者であつてはならな

い、中には二人や三人紳樂氏のやうな同情者もあつて欲しい、又螢ヶ池の人々としても螢ヶ池を背影にして、同情を買ふやうな心持は、微塵もなかるう事を私は信じる。三、私の好きな句に古い川柳塔で、作者は松村敏郎氏で「病は氣からそれは達者な人の事」と云ふやうな句もある事を付け加へる、それから螢ヶ池で思ひ出した事であるが、靜太氏の作品を見せて貰ふと、誠に細い「お前螢ヶ池に来て見る」とも云はれるのであらうが、靜太氏を感情に溺れる事なきを望む。

汀柳Ⅱ私も句評と離れた事になるが、いつか螢ヶ池の句會に招かれて行つた時、話した事でもあるが、不幸にして病氣に襲はれた時、或は失職した場合なども、同じ様な境地であると思ふ、ごちらの場合にも苦しみと焦燥とに、次第に弱い人間となつて了ふが、私は病氣になつた時、或は失職した時、それは長い人生の間に與へられた休息の時間であり、思索の時間を與へられたものと考へて欲しい、そしてその苦しみにより、今後への活動を期する事が一番大切だと話した事がある。今の浮鬼君の句を通じて、私と同じ信念を以つて聞かされてゐる事を知つて、嬉しく思ふと

共に螢ヶ池の諸君が浮鬼君と同じ様な心意氣により全快される日を、祈つて止まない、川柳の上に於ても、春秋君の云はれた様に、悲しみや寂しみの句ばかりに浸らず、元氣發刺たる若人としての句を切に望ましい。

春秋Ⅲ紳樂の餘談續きに、私もこの機會に私の作句信念とでも云ふものを述べさせて貰ひませう。三昧と云ふ事、碁打ちが石を下るすまでの三昧、作句者が一句に成す迄の三昧、其れに生きるのだと云ふ事を昔聞いた。私は川柳作句と云ふ事に就て、人格とか、何の爲にとかを聞かされ讀まれる、眞聖が五右衛門風呂に素裸で浸つて居る時も、酔ひ潰れて大の字に睡つてゐる時も、隙がないのと、同じやうに、川柳作家は一舉一動川柳でなければ嘘だと思ひ、ものゝ觀察、起臥の總てに川柳觀の修養が必要で、その極致に至れば作句技巧も、川柳家も、何の爲の川柳もなく、普通人が「ヤアお早よう」「さよなら」と交す言葉のやうに、ボツボツと句が吐かれて、それが立派な川柳、なければならぬ、それは川柳觀が立派に養はれての事であり、遠くは是は我々の理想境である、作句の道、川柳の道は遠し遠し。(與三郎筆記)

# 生れた家を語る

（向夏の留物として、一貫下の生れた家に就いて（所在地方環境等）を同人諸君に聞いて見ました編輯局）

A B C 篇

## 麻生路郎

私はホントは何處で生れたのか知らないが、七八つの頃、があんたの生れた家だと教へられたのは尾道市（その頃は町）の十四日町（シウシンニチチヨウ）の北側の家であつた。本町に續いた町で尾道のメインストリートである。私の生れた頃は、で陶器商をやつてゐたらしい。

## 朝田新水

僕の臍の緒に明治三十三年九月六日午後十時四十五分男子出生とある。今でも男だ！大阪内本町一丁目二十七番地現在の、谷三交叉点より半丁西入北側本町湯のある所だ幼稚園に通ふ頃は、日露戦争の最中であつても多忙な業務で毎日師團司令部や聯隊へ大八車で納品を仲仕が運ぶのに、共に車に乗せて貰つて馬場へ行つた。只今の大手前公園にあるあんな立派な射的場とてない。當時野戦病院

のバラックに傷病兵の白衣に馴染んでよく遊んだものだ。時に「濠はまり首つりそれが大部分兵隊だつたことを知つてゐるが、首つりの兵隊の足を引つばつた事もある。その頃町内で電氣の街燈までつけてあるのが、僕の家と二軒しかなくランアの家が、多かつた爲め往來は眞つ暗である。明治も終る頃電車道路となり町市四間が十二間となり、今日の繁華となるまで生れて二十年此處で育つた。今でも電車で通る度になつかしい。

## 明石柳次

去年の夏震災後の國を訪ひ僕の家のあつた邊りと友達と歩いて其の變遷の激しさに愕然とした。

震災前までは表通りの一軒好い街だつた家の邊は新道といふものが、出来てから長屋と田圃に變つてゐた。苦の中から生えたやうな老梅お隣の家を枯葉で困つた櫻樹、柿の木も梨の木もみんな跡かたもなく家の庭

## 尼線之助

だつたと思ふ。所には小つげな茹子の花が一杯に咲いてゐるだけだつた。丹後の四辻村です。

お寺の屋根が昔の月を藁つてゐる願樂寺一地方切つての大きな寺、その隣に包まれた家が私の生家です。

清流神戸川の夏川邊から時折きこえ來る夜の口笛私にも懐しき青春時代はあつたのです。

且つて繪にもなき月の小川なる遠蛙思ひ出してならぬ戀

川藻に浮ぶ月、遠蛙、半生の歴史は此處で織つたものです。

實家に歸ればあゝ蛙鳴き牛が鳴き懐舊……なんて、今は私も他家の人間になつちまつたです。こんな風に書くともバラシイ家にもえませうが農する草家です。

## 青木史呂

松島に生れて嘗つては女郎屋のぼんちだつた事もハッキリ記憶してゐます。六歳にして堀江へ轉居しましたが、子供心に父の病氣の爲だと知つてゐました、「七生迄も女郎屋をするな」とはそれから一年父の臨終の言葉だつたそうです、所謂お人好しな人間はそうした社會のものをぢやなかつたのでせう。

「あんたのお國は」と問はれると「憚り乍ら淀川の水で産湯を使つた純粹の大阪つ兒でおまんねん」とすぐにも答へますけど扱生家となるとトタンに腐つたものです、だから或時は九條に或る時は堀江に、殆どほんとうのことを云ひませんでした、そんな譯で私は花街に賣つたのを口にしたくなかつたもので、少くとも私が十年の船場生活時代は、今も尙私は私の生れた家を見る度に憶ひ出は盡きません。

何故ならその眞向ひで實兄が煙草店を營んでゐるのですから、父の遺して呉れた松島最古の老舗として、兄はこの店だけは死んでも離せんと云つてゐます。

色街に住んで地味智に儲けてゐる

## 江戸みつる

明治四十二年九月八日京都木屋町で出生六才の春頃まで住んだんが今はその生れ家の記憶は一つも残つてゐない、商用で時々京都に行くので一度ぐらゐ見たいと思つてゐるサア、昔の儘でその家がある事やら！二十年も前の事だから！

京都はよろしおすなアと相髓し

## 福田山雨樓

宇垣朝鮮總督と同郷……岡山縣赤磐郡瀧瀬村が僕の生れ所在 三方山に圍まれた、草深い片田舎、岡山市から約四里。醫者も郵便局もない。小學校すら他村へ通はしてゐる。

僕は幼少の折他村へ養子に行つたので、幼時の記憶はないが、子供のとき戸水がとて清く冷めたかつたのと、その井戸が大變よく出る井戸で年中三戸ばかりの杓で汲みあげてゐたことである。(今でもよく出るが)それから同じく裏へ大きな柿の木があつて、柿が實る頃に行くと、兄が木の上に登つて、眞赤な熟柿を澤山取つてくれたものである。炊事場の上が中二階になつてゐて、そこへ登るとが珍らしかつた。しかし何より嬉しかつたのは、その家にほんとの両親があると云ふ事實であつた。實のところ僕は十四、五の頃迄

養父母を實の親と思ひ込んでゐたのである。兄弟と妹とが、五人あるの、で賑やかなことであつた。舊作だが次の句は僕の氣持をよく出したものと思つてゐる。

赤松のみざりが僕を生んだ村

## 後藤青兒

國立公園となつた 山陰の秀峯伯耆大山が日本海に押迫つた裾野に三十戸ばかりの寒村がある、これが僕の生れた村である。

名和長年を偲ぶ船上山が、南の窓に見えて居た、山の縁は最つ六百年の歴史を繰返して居る事であらう。

前に小川を控へた、家のぐるりは古い柿の木で圍まれ、其の中に柿の木が十三本もあつた、柿も柿も皆古い木ばかりで大人の一抱えもあるのがあつて、テツメンに赤く熟した柿が晩秋の夕陽に映じて、玻璃の様に強く光つて居た、僕は此の家の十五代目の長男に生れた。

## 日野華水

故郷、ふるさと、生家、人として愛着のない者はない、僕の生家ですが、それは、レター、神戸(今はかう云つてゐる)中央

なんです、諏訪山の南でね、その昔中宮村と云つた土地で、今はその家の前もコンクリートと云ふもので堅められて居ます。僕はその家にほんの最近まで居りました、三十餘年間と云ふ月日なれ、つまり永らく實際の故郷に居た理由、のです、何！庄家ぢやありません、近所では、ほんとうに舊家だつたのです、三十餘年目に初めて、それも生れて初めて轉宅したので、僕の記憶でも裏は一面の如くそして裏山へづーと續いてゐたのです、はつきりと一軒ぼつんとあつた家も、今ぢや道を廻り廻つて探さなければ、分らない様になつてゐますから、ですから、その家にはランプや行燈を吊した跡が、残つてゐますよ、その家の現在ですか、それはきちんと残つて僕の友人が住んで居られます、時々お邪魔に行きます、が、故郷へ歸つた様で、こちらがお客様か分りません、その家の昔の話としては、近所で狐や狸が出たり、追割が出来て、今は夜でも賑かです。

## 平井春光

まだ電車の敷かれてなかつた、岡崎橋を東へ二丁の濱側で、日露戦役耐なりし頃、はじめてこの世の空気を吸つた。

三尊講の講元だつた關係上、月に一度はお講が催されたので、「ふーたらーくーや」の御詠歌を幼ない時から覚え、六つ七つのうちから、北の御堂へお經を習ひに行き、それをまたお經のすきな祖父が、毎晩々々強制的に御佛壇の前で復習させたので、御詠歌とお經は、一時そつとやうなところまで上つたことがある。

## 東谷聞路

所は京都市猪熊三條下る西側、薄暗い店、土間の中央に豆を摺る臼、白をひく爲めのすけた竹が天井へ延びてゐる、外へ向つて豆腐を入れる大きな水樋、右の方に大きな釜が二つ並んでゐる豆腐屋の家、四人姉弟に一人の男の子で末の子として生れた、私が物心つく時分母、そして父と續いての不幸に義務教育も終らぬうちに、丁稚として他人様の飯を食ふやうになつた、世間で云うこれが苦勞とかいひのでせうか！

## 姫田夕鐘

臍の緒を切つたのは、徳島市大道三丁目の古色に艶のおびた、現在の家なのですが、なにしる町内で、三番目の古顔なのです、今年で丁

度いつむかしの五十年になるのです、家の前には美しい眉山が、緑を流らしてゐる、つい近くに居た、葡萄芽の文豪モラエンスは、第一印象を、身體に沁み入るやうな緑ともいひ、恵みの緑とさへ呼んだ。

## 平井與三郎

家のない孤兒院の學生が、大鼓を叩き乍ら戸毎に訪れて來ると、怖いもの、やうに母一人と團栗の背比らべのやうな小さな六人の兄弟は、表戸を閉めに行つたもの、だつた、子供と女丈けの家にしては、ガランとしてゐて、夜など二階へ昇るのが、恐ろしい程のひつそりとした大きな家だつた、勿論生れた頃は父もあつた、父の寢所としてゐた店の二階の居間に、ぼんやりとランプが、灯つてゐた事を記憶してゐる。

薩摩堀の願教寺の邊り、阿波堀川に染物屋の晒舟の浮いてゐるのを見ると、藏の窓から夏の晝トリ晒物の水が、切る、齒車の睡い音を氣情なく聞いてゐた、夢を見る少年時代を思はれてならない。

## 市場没食子

僕は純粹の大阪人です、東區岡山町の生れ

最も其の頃は西玉造と言つたのです。本家は今も處處で祖父様の遺業塾屋をしてゐます。家は三回程建て替りました。若い父母の間に長男として生れた。僕は眞向ひにあつた軍醫あがりの同業醫某夫妻に可愛がられてすんでに貰はられてゆく所でした。あの時貰はられたといつたらお前は倅だつたが。なアと母はよく言ひました。父が學職を嫌つて色々と轉業し其の度に失敗で家庭が暗くなつてゆく時等に一入母の頭にそんな事が浮ひ出したのでせう。僕が十二三頃其の醫者は逝くなられました。若し貰はれてゐたら今頃は醫者になつてゐたかも知れませんが。貰はれなかつたら藥劑師ごちらにしても病々相手の仕事に運命付けられてゐたのです。姉弟としか人が見てくれなかつた母も既に逝くので今年で八年になります。

## 生田翠夢

京は木屋町、松原を上る今と同じ席貸の多い。麗めかしい。霧圍氣で、前に高瀬川が今よりもずんと奇麗く水も豊富に、汀も洗ふてゐた。汀は大小の石で道端からすぐ河水も掬ふ事も、洗濯することも出来た。川端には柳がずらりと並んで、よく金魚賣が休んでゐた。

夏ともなれば、川を逆のぼる、高瀬舟を曳く船頭達の「ホイ〜」と云ふ間のびした掛聲が如何にも、睡氣を誘ふ様に聞えて、その中を日本最古の電車が、單線でがたりごとりと走つてゐた。

となりの席貸の女將に、とても可愛がられたのもで、五六才の頃部踊から、歸つて團扇片手に「部踊りはヨイヤサー」といとも品よく踊つた事をかすかに覚えてゐる。

## 喜多春秋

西堀川の家、私の生れた家、大阪の北區の大火、もう二十六年もの昔、火災保険が對岸の火事を笑つてゐる町々を歩いて、その勸誘のうるさく加入した。加入者が焼け出されて保険金を貰つたとか云ふ話、その大火事で焼けてしまつた私の生れた家、しかしその焼ける以前にはもう既に大阪に居なかつた私たちの一家、私は午前〇時前にオギャーと生れたんださうな。親たちの言葉を信じて七月七日生れですと誰にでも云ふことは云ふが、ほんたうだらうかとも思ふ。親が十二月三十日生れを一月一日生れにしたり……。生れた家にして、疑へば……。

やがて地球にも終末が来て、私の生れた家

がなくなつたやうに、私の墓地も跡かたもなくなるであらう。現に今、古い墓地が塌崩されてゐる。都會が大きくなる爲に。

## 北山悟郎

阪鶴線黒井驛で下車東へ約廿町、野上野字、田中に常夜燈の有る、四辻東北角屋敷で道路より十段位の石段が有る、や、高の家の入山新で生れた、三男が即ち、私、悟郎です。家は百姓で有り乍ら、父は小間物屋、魚屋木苗、又貿易物らしい長さ、五六尺、巾三四寸位のかんなくす、見たいな物の製垣や、種々な方面に手を出し、其都度失敗し、二頭の牛の一頭賣つた時等、私は二三日駄々をこねた事も有ります。先年歸國の節懐しい春日部小學校に父の納めた杉苗が、高い生垣となり校舎を包んで居るのを見た。

## 町田承春

僕の生れた家つて、伊豫早拔のする處、松山城南約三十町、石井村舊土佐街道に添ふ四十軒餘の全農家の小村で、一族の家と云つても足輕かも知れない。蘆茸本家等小つげな一農家でも先祖は相當古い歴史を持つて居る其の昔は郷士とか何んとか、可成勢力もあ

つたらしい又、松山藩とは縁故が深いらしい其の頃は家の周囲は土塀であつたらしい跡があるが今は樫木、其の他雑木が繁茂して生垣が家を覆ふて居る、其の中に一抱程の柿、榎、ムク等西北角に四五坪の竹林あり、西南角に生家の歴史を一番よく知る老松本家を覆い昔を偲ぶに足りる曰く「昔は厩に今は切れ〜」つて云ふ土族の土百姓の四男坊に生れたのであるから生立ちも仲々、麥飯を食つて、みづづを切つて、土臭く育てられたる十七年、其の後銀行生活に入り十三年になる。

### 増位 汀柳

第五回内國勸業博覧會が天王寺公園に開かれた時に、私の家の物干臺が新調されて、その年に私が生れたのだから、亡母は「お前と物干臺は同じ歳だ」とよく云はれてゐた。倅か不倅かはしらぬが、今の私の家は私の生れた家で、亡父もこの家で生まれたさうである、だから引越の味はまだ知らない譯で、變替もなく生まれた家に三十幾年かを起居してゐる事になる。

この私の家が現在川柳雜誌社事務所となつてゐて大阪市中の高臺(俗に上町)に位置してゐる、三越のつべんより遙かに高く水害

の憂ひだけは更にならない。然し少しも發展のせない土地柄で、私の生まれた三十幾年前も恐らく今と大して變りのない町並であつたらうことを想像される。

その古くさい町並に相應しい酒問屋の構えをぶつこはして、不釣合な洋式の外觀をもつ今の家にした私は、今にして思へばよくもまあこんな變態なものを造つたものだと思つて冷汗を覺てゐる。

北の大火を姉に教へられて見た物干臺、南の大火を真近に見て、戦慄した同じ歳の物干臺は、今の露臺のどの邊にあつたのかしらとひとりて屋上に登つてみた。

### 水谷 鮎美

そうですなあ、なつかしいことゝなるとは、んうにまぼろしの童心に、よみがへらますね、このはがきを頂いた今朝こそうれしきものゝひとつでした。さう指おりがぞふれば明治大正昭和となんだが、急に玉手箱をもちつたやうですれ。さうです生れた家こそいくつ何十成つてもあまひ感觸のあるものです。大阪市北區現在(は此花區)上福島一丁目二五

四番地醫師水谷幸太郎の長男として、明治三十三年二月五日に生たので、五歳の年に父

は大阪市役所にやはり醫師として奉職しました裏が川だつたのでよく、裏へで、三日月さまや蟹や朝の川の水をみていましたそのうち明治四十四年の北區の大火災にこのなつかしい僕の生れた家は、焼失してしまひました。十二歳の童心の人生への最初の驚異だつたのです。このあまくわびしき想ひ出から引抜きにたいいまの鮎美(三十六歳)をみるのもおもしろいでせよ七月十二日あさの十時五分です。

### 宮岡 白峯

海へ「四十キロ」「川へ二キロ」「山へセンチ」の和歌山縣東牟婁郡請川村字野竹二〇八番地東に熊野連山西に大塔山を背負ふ總建坪五十か六十天保元年の建築であり、細長き庭園をいじる祖父の姿は忘れ難き一つである東天紅をなす頃薄れ行く谷間谷間の白雲是即ち生家の絶景こそ絶景である。

### 村松 夢 裡

羽左衛門の正太郎ではないが、須原の糸とりの木曾節が絶勝寢覺床の奔流と共に遠く流れて居る、然しそれと程遠からぬ信濃國は上伊那郡高遠町此處で、孤々の聲を上げまし

た

高遠峠の頂きから馬の背に乗つて、慈母の懷に抱かれて諏訪湖の町へ下つたのは、今は遠い〇〇年前、水子の赤坊、夢にも臆氣にも乍遺憾生れた家は知らないのです、その後一度この地を是非訪れてみたいと思つておりますが、未だにその志を得ずでせめて一度は訪れてみるつもりです。こゝで私の身評を明かさなくてもよいが、家は昔の言葉で云へばやせても枯れても、天下のなんとやら東京は菓鴨の貧乏屋敷、父の役人生活で、御料局今の帝室林野局あつちこつちへ轉住の末兄弟十二人現在七人みんな生れた家が違ふのも……」(舊姓小野)

### 西田 艸 樂

私の生家は丹波、詳しくは兵庫縣水上郡小川村、二百姓の子、丹波といつても御想像程に山深い感じのせめ、播丹兩國の境堺近くに福知山線が通過してをり、播丹線の終點があつて便利も悪しからず、加古川を溯る事十四五里わしが國さで見せたいものはと、自慢になる程のものはありませんが、美味いお米が穫れるし、丹波栗は實家でも栗林を有つてゐます。山紫水明四季を通じてよろしい。家の

周圍に甘柿、澁柿が枝もたは、に實る光景は懷郷をそゝる一つです。ごうして、鬼なんか棲んぢやあませんよ。所詮鎌を握り、鋸を振上げて暮す人間でなかつたのでせう。大阪の子になりきつて二十数年、今では百姓は呑氣だなどと思ふのも、都會の喧嘩がぼつ／＼厭になりかけてゐる證據です。

### 西村 明珠

生れは大阪市内、しかも歴史で名高い高津神社の附近と教へられてゐる、そして十五六年前大阪歩兵第八聯隊に入營す、これ丈け言へば川柳雜誌社に席があるのも頷づいて頂けると思ひます。

### 西 い わ を

安珍清姫の情熱に昔より餘りに有名な道成寺、日高川を経て南國情緒と温泉氣分を満喫する白濱温泉こそ吾が故郷なれ。  
代々氏神様をお守してゐた、せいも小さい頃からお宮の子と云ふ綽名がついてゐた。衣冠束帯を装ふた父が餘つ程偉らくみえた、殊にお祭りの時懇懇に祝詞を上げる、父の姿は嚴か其の物であつた、臍白連の兎角噂に上つ

た事は云ふ迄もなかつた、こゝした生家に育つて来たが神主の子としては、凡そ變つたサラーイマンの一人として、異郷で川柳に親しんでゐる。

### 西村 山 月

下呂温泉の歸り道筋、日本ラインで桃太郎君の出生地を左岸に見て、犬山で其の舟を捨岐阜鶴飼で夏の一夜涼を入れて復養老の瀧の涼を更に入れて。之が過ぎると風の氣が鼻は垂井のコホン／＼と關ヶ原、長岡過れば熱は醒ヶ井とお笑の東海道線最高難所(飛行機も補助機關車共に、セキタンに苦しみ此の汽車は此所で喘息病か又「ゲイタミン」不足か何人も案ずる位。其舊徳川家康君と石田三成君と天下を搖がせの物凄く赤血を加茂川洪水以上。今に置き土地に浸みる此の伊吹連峯の石田三成陣所笹尾山麓北國街道關所小關村、此の南隣中仙道には有名な不破の關所の山中。と申すると温泉かの様ですが、ナンノ石川五衛門君式風呂で、棺桶の様な御心配は決して御無用御笑ひ下さるな、私の生家を……火付鐵砲も刀も有りませ……(岐阜縣美濃國不破郡關ヶ原町字小關)

## 中島鐵洲

生家も鐵工業です。住所は舊生家の位置から約貳拾間あまり離れた處にもう動かぬの地を求めました鳥取市の川端筋は(一三三丁)は遺頼掘で此の間まで(萬よし)と云ふ料理屋もあつたカフエー十四、上かんや六、工突麻雀六、旅館五、うごんや三、キネマ常設館三、こん處に鐵工所が一ツ毎日シヤズと工場のカラ／＼云ふ音で嫌になる事もあるが生れた處は離れ難いものです。

## 丘遊舟

時は大正四年六月十四日、大阪は天王寺區の東高津西之町にあつた馬小屋よりは少しましな借家で、この惱み多き世の中へ送り出されたのがかく云ふ私だ。幼時には家庭の事情で、鶴橋、木津、高津町を轉々とした。生れながらの長男に本膳を据へ私はこんな境遇に生れたのである。大阪府士族と一筆太に記された門標の中で、生れた私は幼にして質實剛健の氣風に養成された事は、現在の私の素行を知る者も知らぬものにも、特筆大書して誇る可き事であると思ふのである。

## 岡崎祥月

水郷松江の南方五軒借家の四軒目が僕の内である。素封家岡崎兵右衛門の家であるか

らがつちりしてゐるが、木は時代を語つて時々雨がもつてへいこうする。その門口一軒半のちつばけな家にわづかな商品を商つてゐるちつばけな家である。

## 大鶴喜由

別府に三里大分に六里日出に十丁程東に位し地味豊に百姓貧しと云ふ現狀だ。遙かに發ゆる一條の噴煙由布岳即ち豊後富士は私に寡言に爆發性を與えてくれた。汽車がついたのが十歳位自動車を見たのは十五歳位で別府龜川が發展するにつれて日出港には大阪通ひの汽船がつかぬやうになつた。それが二十歳位の時だ。童の頃の乗合馬車に於ては乗合自動車が通つてゐるあの幌馬車の唄に何時も思ひだす、秋みのる頃日出臺に演習があるそのあと必ず雨が降る砲彈と雨はつきものだ。龜川には日本一の大佛さんが在しますこんくりーとの――

## 首藤竹楓

九州の小京都と云はれる田紫水明な大分縣直入郡竹田町三三九で軍神廣瀬中佐、壽聖田能村竹田先生と、同じ様な産聲を擧げたらうと思つてゐる。地勢的には盆地で南方に大阿蘇の噴煙を望み、近所の餘徳で廣瀬中佐の御母堂やお乳母さんからよく可愛がられた事を憶へてゐます。

田舎町に不似合な豊音寺と云ふ寺の大樓門が我家の何倍かの大ききで押しつぶさる様にそびえてゐるのが、子供心に憎くらしく思はれてゐたのか今だに忘れませぬ

## 清水友帆

夢多き少年時代を北國の生家、育つた私の思ひ出は軒の深い家と大きな圍爐裏にいつも火の絶へた事のない冬が特に印象深く残つてゐます

庭の大きな松と一面に葛のはへた板敷の打水のすが／＼しさは植木と共に父の自慢の一つでした。兄が江戸菊やコスモスの種をまいて丁度双葉の頂を掃除好きの祖父に草と間違へられて皆むし取られて了つた事もありました。思出の家も町も、先年の大火で跡方もなく焼けて大阪の新開地の様な家が、建つて美しくなつたが私にはとても淋しい故郷の姿となつてしまひました。

## 眞田幸捐

和氣清麿開基弘法大師が二度お登りになられた再度山の麓、神戸海洋氣象臺、神戸聯隊區司令部北一丁交番所前二階建五十六坪瓦葺水道の設備あり商家向時價一萬二千圓土地付神戸驛より三分但し自動車が即ち私の生れた家であり、亦今住んでゐる處でもあ

る。  
こゝへ来たのは、年前でずいさ煙があり近くに牧場もあり家もまばらで物騒な所であつた。それが、ナト神戸の發展につれ今では一等場所である、これは勿論私か母のお腹にもゐない頃のことである。

## 高橋かほる

私の生れました家は今の私の家の向ひの家で表はドンチャンとは云ひませんが裏はひっそりして松島のおやまが難波びようゐんへ行く屋形船が通る西横堀清水橋の東詰を南へ入つた四軒目の西側の「只今は都市計劃で道が廣くなり西北角になりました」家に七人兄弟の可愛おとんぼで蝶よ花よと育てられて來ました。さかいに今でも日傘に魅惑をもちます。

## 竹内機見女

生れてから物心のつく四歳の頃まで居た安田は、四國に土佐の國の城下高知市から室戸岬を結ぶ海岸線の丁度中頃にある海山に恵まれた小さな美しい町です。

その頃の父は木材で失敗し、規類の鮭の買入船で、陸路を北海道にまで遠征したか之もおもしろくなくて、室蘭から函館に向ふ途中で暗礁にのりあけて難破して九死に一生を得たとか。

たま／＼故郷の土を踏めば「まあ鶴屋のあ

まやんかれ、もう高知の女學校もすんだつてのう。お父さんやお母さんがあつたら、なれば「かえ、ろくに。ふたありとも、え、お人じやつたが……」。土着の老いた人達だけがかう話しかけてくれるのが、その頃を忍ぶよすがとなるだけで、他に思出がないのも「季美ちゃんが高知の子」兄弟にこの尊稱を頂いてゐる理由もそこにあるらしいです。

## 植山九天

天下の奇勝耶馬溪の入口、中津市の在で海に一里、山に一里の農實村、こゝには父が若い時建てた舊式な家があり、先祖の墓地もある。老父はこの村であらゆる村の名譽職を務めてとにかく無事暮してゐます。そしてこの家で生れた者兄弟十人あります。

二男の義隆が九天の私父は今年七十五才母は十八年前亡くなりました。父は時折家族バスで時折孫を見み上げするのを楽しんでゐます。

## 吉川啞人

瀬戸内海の宮嶋の附近の大島郡と云ふ一郡をなしてゐる一孤島の中心地久賀町、郡は三町ルケ村となつて居ります。縣下第一のアメリカ布哇へ出稼人の多い島であります。扱て私の生れましたのは、

久賀へ来て下戸樂しみが一つありと水府氏の名吟を頂いて居ります「吉川饅頭

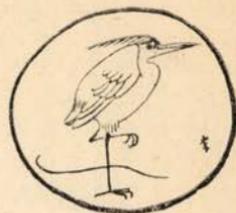
」の製造家の次男傳統的の菓子商と縁の無いラヂオ商しかし人間は至つて甘く出来て居ります。

## 山本丹路

順慶町一丁目四十なん番地かのさ、やかな町家の、支那から三番目のほのぐらい空気が充滿した部屋で、男女合して六番目の至つて虚弱な赤ん坊が生まれました。それが小生です。町内と町内との悪童同志のケンカに参加する程の歳までそこで育ちました。

## 吉田水車

何でも母の話によると當時父が職務の都合上舞鶴に勤務した頃そもそも、落語に言へば此世へアチ生かされた譯です、そして生れた家は鎮守府長官々舎の一隅とかで、折柄唸る軍艦旗揚揚式のラツパの音と共に目出度産聲を揚げたと言ふのは、私の想像ですが生れると直ぐ舞鶴町のさんばの家へ移されて育つた相です、その家のことが詳しくくわが前に大阪へ移つてしまつてさつぱりわかりませんが、そのさんばさんの家か今でもあるとのこと故、私の大阪在勤當時舞鶴へよく出張した折、度は寄つて當時のことどもを聞くつもりであつたのが、其機曾なしにと／＼名古屋へ来てしまつて、残念と思ふてゐます。



# 當世不通漫談

梅 木 塵 山

此れは豫て、落語の「蒟蒻問答」でお馴の、蒟蒻屋の六兵衛、田舎寺の道樂和尚の兩人に、飛入りの三途河の奪衣婆の爐邊漫談を、傍聽筆記したものが、いづれも舊思想の頑固者の世迷言だから、現代のモダン坊主とか、モダン蛙とか呼ばれる人達には、一向に通じまいが、夫れは先刻承知之介だ、と三人が言つて居た。

- 蒟蒻屋の六兵衛
- 田舎寺道樂和尚
- △ 三途河の奪衣婆

□ 漫談といへば、どうやら當世流行の、漫才の親類らしく聞えるね。

○ その漫才といふ奴は、一兩年前までは何とか萬歳と呼んでゐたものだが、いつの間にか、漫才と無届改名して、都鄙に跋扈するやうに成つた。

□ 全體、漫才といふ文字を擇んだ奴の氣が知れない。

○ 浪花節を浪曲と改稱して、高尙がつてゐる世の中だからね。

□ 昔の萬歳には雌雄が無かつたけれども今の漫才は、多く雌雄がつるんで、寄席の高座などに、不景氣な面を晒し、愚劣な駄洒落を連發するには閉口だ。

○ それも速口で詠りが多くて、何が何やら一向に譯が分からない。亦あれを聞

いて、拍手喝采する唐變僕が有るのだから、木ツ葉藝人のあとが絶えないのだよ。

□ 江戸時代の芝居や寄席では、拍手する客は無かつたから、あれは明治維新後の舶來品に相違ない。

○ 無暗やたらに手を拍くのは、都會の人よりも地方の人に多い。地方の人は、鋤鍬の柄を握つて、日々に勞役するので、掌の皮が大鼓の革のやうに硬化して、何程ツツばたいでも、摺割ける惧が無いから、無暗にばち／＼やるのだらう。

□ 出演者の技藝の巧拙も解らぬ癖に、一

人がばち／＼始めると、直に他の者がそれを真似てばち／＼遣る。それが役者の臺詞や、淨瑠璃の文句を、滅茶苦茶にすることがある。

○特に京阪人は、拍手をする事が好きのやうだ。舞臺の幕を明ける間際にばち／＼、幕を引く間際にばち／＼、平凡役者が花道に現はれてもばち／＼、縫包の猪が飛出してもばち／＼、鐵砲の音がしてもばち／＼。イヤハヤ御近所お騒々しい事でごさる。

□此の頃は、東京の寄席や演藝會でも、大分に拍手が騒々しく成つてきた。

○東京には、一度も見たことの無い。名人小團次の型はこの、田之助の振はあゝのと、高慢をいふ似而非刻通が、多く巢を喰つてゐるやうだと。

□近頃の新聞雜誌社には、専門の劇評家と稱する先生が居て、各劇場の評判を書かれるけれども、江戸時代には、京都の八文字屋の役者評判記ばかりで、其の外に劇評といふものは、世に發表されなかつた。

○その評判記は、甚古いものであつた、三都の各芝居で興行された、一年中の狂言の評判を、一纏めにして出版したのであるが、江戸の末期に至つて、遂に中絶した。

□夫れが明治十一年の十一月かに、東京の六二連といふ、好劇家の團體で再興する事と成り、黒表紙の「俳優評判記」が出版された。此の評判記は、當時の新富座の劇評而已で、他の座には及ばなかつた。劇評は六二連の幹事の宮城文魚、高須高燕、富田砂筵の三人が執筆したのだ。

○六二連の「俳優評判記」が出版される前、即ち明治十一年二月に、新富座で興行された「西南雲晴朝東風」といふ名題で、西南戦役を脚色した狂言が、大入り大當りであつて、其の劇評が當時の某小新聞に、掲載された事を記憶してゐるが、その頃より新聞に劇評が出るやうに成つたのであらう。

□六二連の「俳優評判記」は、不定期刊行で十數篇まで刊行されたが、其の後

多くの新聞雜誌で、競つて劇評を掲載されるやうに成つた爲に、遂に廢刊してしまつた。

○當時の新聞や雜誌の劇評家の中でも、最名著なのは三木竹二、鈴木芋兵衛、杉原青々園、杉野阿彌、竹の屋主人、岡鬼太郎の諸氏で、此の中でも「東京朝日新聞」の、竹の屋主人の劇評は有名であつたけれども、何の役に對しても、只よし／＼といふ贊辭のみ多くて興味は甚薄かつたよ。

□此の外に、南新二、幸堂得知の兩氏のやうな、江戸時代の通人で、劇評を善くする人も居たが、青々園、鬼太郎兩氏の現存される外は、孰れも他界の人となられた。

○三木竹二氏は、本名を森篤二といつて、鷗外漁史の實弟で、みづから「歌舞伎」といふ月刊雜誌を發行された程の劇通であつた。

□今の駈出し劇評家の中には、頗る怪しい者が居る「忠臣藏」は、十二段目まで有るものと思つてゐたり「壺坂」は

大近松の傑作などと、與太を飛ばしてゐるのがある。

○是等の手合は、各座の樂屋に闖入して俳優等の邪魔をなし、先生々と敬遠されるのも知らず、大劇評家氣取りで無性髭の生へた腮を撫でゝゐるばかりか、俳優の自宅の晚餐時に押懸けて、一杯の酒一片の肉の馳走に有附き、尻尾を振つてゐるのさへ有ると聞いた。

□近頃、東京の某劇場の經營者が「低級なる花柳界を對象をせず」と言つたとかで、花柳界の姐さん達の怒りを買ひ「低級だなんて莫迦にしてゐるよ、わたし達が高級で、貞淑であることは、不斷御最負にして下さる、旦那方が先刻御承知だ。ネエ皆さん、あの劇場へは、今後見物に行かない事に爲ましてやうよ。」本當にさうですよ、あすこへ見物に行かない事にすれ、連中の切符を買はされないばかりでも、わたし達は大助りですよ」などと、忽に相談一決して、某劇場不見同盟といふのが

出來た。

○不見轉と不見同盟とは、由縁が有るやうだね。

□江戸時代には、芝居を見物に来る藝者は實に尠く、偶に其の姿を觀る事が有つても、僅に一人か二人であつたが、今の三都の大劇場では、一二等の見物席の三分の一乃至四分の一は、高級なる花柳界の淑女達に占領されて、他の觀客は肩身が狭いやうだ。こんな現象は昔の芝居に全く無かつた。

○京阪の藝子はんや舞子はんは、觀劇中に舞臺の俳優に對つて、黃いろい聲を勇敢に浴せ懸るが、流石に氣が強い東京の藝妓や雛妓にも、あの眞似ばかりは出來ない。

□夫れから又觀劇中に、懷中鏡を取出して、刷毛で鼻の先を叩いたり、紅を口の端に塗つたりするのは、不作法千萬であるが、近頃は東京の花柳界の女ばかりか、素人女までがあれを遣つてゐる。その甚しいのに成ると、汽車や電

車の中でも遣つてゐる。

○昔の女も外出する時には、懷中鏡の附いた紙入を持參したけれども、他人の居ない處へ行つてそれを取出して、顔の化粧を直したもので、衆人環視の處であんな事を爲やうものなら、色情狂者だと言つて、馬の脊などを打附けられたものだ。

□昔の女よりも今の女は、面の皮が別誂で厚いのだらう。

△もし、わたしも今其處へ行くから話の仲間に入れておくれよ。昔の芝居の話ならば、わたしにも少し持合せがあるから。

□ヤア三途河の婆さんの木像が、何か口を利いてゐる。

○あの木像は時々に魔が差して、口も利けば踊り出します。

□和尚の夜のお伽も爲やアしない敷。

○莫迦を言ふな。サア婆さん此處へ來て何時も自慢の、八代目團十郎や、名人小團十郎の藝談でもするがい、。



# 四・國・遍・路 (その三)

## 松山 酒井大樓

懐しの五劍山 柳友五健氏前號五劍氏の名に因む五劍山此處で五健氏から便りを入手  
懐しの寺 懐しの友の文  
こゝより二里にして志度の町平賀源内播磨の地を有つて銅像が有る

源内の銅像町の埃浴び  
謡曲に淨曲に高い志度寺溚人と藤原淡海公とのローマンス、子に對する溚人が決死の愛之を申ふ淡海公の建寺こゝな傳説の緣起はとても床しく懐しいも、です

傳説に残る決死の母性愛

三月二十五日愈讀妓を廻り終つて八十八番大窪寺へ着く一、番靈場阿波靈山寺が札初めなれば此處で終る苦だが私にはさうは行か無い

結願所まだこれからの杖をつき

結願所大窪寺の御朱印は頂きましたがまだ前途は遠遠です阿波の國へと志していざさらば讀妓よ待つてくれる阿波

愈阿讀國境を突破して一番札所靈山寺へ着

いたのが三月二十六日氏の道筋には孝靈天皇の皇女を祀る大水主大明神四國總奥の院與田寺田ノ口薬師白鳥神社三里の松原義經の突破せよ大阪越等々々澤山の名所古跡が有るので徒歩なれば定めて得る處多かりしならんも十里に餘る國境の嶮道とて自動車便を借し爲

パスの旅見落して行く名勝の地  
好いとこでしてたよと徒歩の自慢顔

第一番札所竺和山靈山寺の緣起 行基菩薩の御開基に成りし聖武帝の御勅願道場でありしが弘仁年間大師四國八十八ヶ所開創の砌當山再興せられ天竺の靈山を和國に移すと云ふ御心で山號寺號をかく定められたもので有るとか、然れば天竺にも八十八ヶ所の本家本元とでも云ふべき靈場が有るのかも知れないと思つた

巡禮の心得論す靈山寺  
一番の札所の讀經念を入れ

一番の札所より十番の札所切幡寺迄の間々一般に十里十ヶ寺と稱し四國を廻り得ない人々殊に京阪神方面の忙かしい篤信家がせめて大師の御足跡を踏まんものとの信心から此の十ヶ寺を參拜する人が多いので其の混雑一通ならずであるがそれ程大師の敬仰者が多いのかと思ふと四國遍路の身として嬉しさの極みで有つた

十ヶ寺の札所に多い大同行  
十ヶ寺に大阪訛り京訛り  
第三番札所金泉寺の境内に長慶天皇御陵上申地がある

涙して聞く御陵の上申地  
第五番奥の院に有る五百羅漢へ參拜  
羅漢様子供に好かない御顔  
十番切幡寺此處の寺名に就て領ける傳説がある

弘仁の昔大師御巡錫の砌當山麓にて一人の心正しき老婆から一七日の施しを受けられた後最後に其の織つて居る布切れを乞はれし處老婆は惜氣も無く切與へし故此の寺號が生れしとの事真偽を論ずるは野暮で有るこゝうした傳説と寺名の相一致する寺は枚舉に違なき程現存するがこれに依つて其寺名が有難くなつて來るので有る此等の傳説は餘り詮議しない方がよいのでは有るまいかと思つた

傳説を信じて有難いと極め  
信心の心を増さす御寺の名



## 日本名所名物川柳

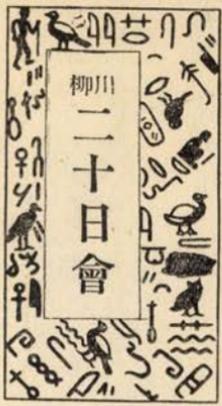
(東京の巻)

前田雀郎選

宮尾しげを畫

### (三) 浅草

浅草で行く所まで行きつくし	宵明
義理堅い乾分と神谷バーで酔ひ	史葉
遊學のもう浅草の灯に馴れて	都會人
仁義されさうに六區の闇を抜け	佐保蘭
浅草のたかられさうなところを抜け	桂林
浅草でばつたり國の友と逢ひ	卯三
浅草の夜は紙屑へ吹きたまひ	水客
南無觀世音菩薩へ遊ぶ灯がともり	徳三
仁王門くゞり西陽の人の中	一彌



柳川二十日會

川柳二十日會にはさなだても出席出来ず、毎月二十日の午後から夜にかけて不持洲、南海鏡玉出陣三丁キング喫茶店、で路那志亭を中心に語る會です。會費の定めはありません。

二 日會の出席簿を見ると、満一周年と史呂君が書いてある君は此の一ヶ年皆出席、今日も翌早朝大峯登山とかで早寝の用意に晝間出席して置いたらしいその歸つた直後へ僕が顔を出した。出席率から成績はよくない僕、△ナナちゃんの支那服が逆もよく似ついて可愛い。土曜日の午後といふセイだけでなく、此項キングはよくはやつてある美味いコーヒートとホーム、ライクが特色なのである。おかげで奥さんと話す時間がだん／＼殺がれて行くがこれは喜ばしい不平である△夏祭と大掃除が町のどつかにある七月である出席

がひどく少い一周年なんか氣のついてる者は恐らくない。禿山君は當直だし、豆萩君は近頃出にくいらしいし、定連は來ないナと思つてみると、世間音君が見えた。話相手が出來た。店は入替り立替り客が絶えない△灯が點いてからバラ／＼と小雨が來て幾分涼しくなる。機見女さんが見え、引續いて汀柳氏が、歌舞伎座の卓球をしまつて來られる。社へ電話して先生に早く歸つて貰ふ。晝間から待甲斐あつて一時に賑やかになる△先生の日頃の多忙さをお察するが、手傳へる範圍でないから致方もないが、平素虚弱に見えて、い

ざとなれば中々使へる軀を感心する△汀柳氏の語では八月特輯號の葉書文が非常に寄りがい、そうで今から期して待つべしである。(紳樂) 紳樂さんの歸られたのとすれ違ひに入つて來たらしい、汀柳さんが當直の禿山さんに電話で擱へられて與太られて往生してゐられる、又酔ふて二十日會の殿を勤める私である。時間は正に未だ私等の宵の午後十一時新版の流行唄が鳴つて御店も急いらしい、先生と奥さんと汀柳さんが八月特輯號の鳩首會議をやつてゐられるのを陶然と眺め乍ら美味しいソーダ水のストロロに夏を戀ふ私、暇を辭げる頃には雨もすつかり暗れて奇麗な月が風に吹かれてゐた(與三郎) 光纏句會に一時間近くも遅れて出席しますと、紳樂さんが唯一人體上半身は座禪の姿よろしくOTテーブルについてゐられま

した。そこへ路那師も奥より登場。柳友の噂などしてゐる所へ汀柳さんが出席。例によつて例の如く光纏會の出席者は有りませんでしたが遠方の方からの投吟を得て、私共のこの句會も無意味なものでない事をうれしく思ひました。併し結婚された方はハンデイキヤツプをつけて、ともかくとしても、未婚の方は川柳にもつと／＼魂をうちこむ事が出來ないでせうか。例へば教會で牧師の説教をきいて盲從的にたゞ満足してゐるだけではほんとうに自らの道をみきわめる事が出來ないやうに、他力で川柳をやつてるといふのでは意味をなさないではないでせうか 山百合が二三輪首をかき上げてゐるルームには柳人の醸する暖かくもなつかしい空氣がひそんであります。名残り惜しくそこを辭して十五間道路に出るとすが／＼しい雨上りの風が吹き渡つてゐました。(機見女)



彼女とは羊であるさうです。あ、羊ならいと柔順でせう。彼氏の顔が氣に入らないと云つて振るやうなことはありますまい。

もつと面白いと思ふことは所謂馴染になりますと、暖簾をくると「何番あるかッ」ていふんです「居る」といふとお項目を置いて入るのでありますが、彼氏は愛する彼女への土産を持つて行くんですが、それを見た羊はト首をかかげて如何にも待つて居ました。ふうこそと言つてゐるやうな媚態を惜し氣もなく現はすさうであります。その情は人獣の境を超越するかに見えるとは恐ろしいと思ひます。

これは一体なんていふか聞きもらしたか、或は羊奴とでもいふのが知れませぬ。

笑つてイ、か

泣いてイ、か

松山 前田 五健

◆瀬戸内海の女王として、我も人も許してゐ

たみぢり丸の衝突沈没に就て遭難者の親族として笑つてイ、か泣いてイ、かの色々の話を見舞客から聞く

「あの時干山丸が衝突したまゝ、押して、いたら、こんな惨事は無い筈じや」之れは新聞に出てゐる何やら規則を見て、同情から出た言葉であるが傍らから亦た一人が「然し規則はさうでも、若し押してゐたら、此の大穴の衝突に、押しとはげしからの敵ではあるまいし、死亡者の多少は別として、キツト避難の聲が出るに違ひない」

「けれども、淨りりの文句にも腹へ突き立て引つかきまわし、引きぬくもろとも、トツト息き泡へ……と云ふ事があるから、抜くのがいけんと思ふ」

「等て、假りに抜いたら、いけんとしたら、この茶瓶へ、コウ突つ込んで」茶瓶のツルへ扇子を入れ

「みぢりの方は一、七〇〇トン、其れへ水が入つて二、〇〇〇トンにも三千トンにもなる干山丸は二、七〇〇トンみぢりの重きでモ

口共に引き込まれる筈でないか、そしたら、誰れが助けるか」成程」

◆船へ乗る時には、空氣入れ、チヨツキを着て、スワツと云ふ時は、ゴム管から吹き込んで、忽ち、救命チヨツキとなる、コレハ、イ・發明だらう」百人の乗客中、みな、みな着ておれば問題ないが、十人が二十人が用意したとすれば、あとの人々は、あの人に取リ縋つて、おれば大丈夫と寄つてたかつて押さへ込まれて、終ふでないか、中には體量二十貫、サツパリ泳げんと云ふ様なものが、縋りついたらごうする。「成程」死體を受取りに行つた時、商船側は一切無抵抗主義の如く一歩退いて視ると、氣の毒の棧にも思ふ程であつた「遺骸は船でお持ち歸りてしたら」「船ツ、馬鹿を云つちやいかん船は眞ツ平御断りだ」それでは汽車で……」「汽車ツ荷物じゃない、馬鹿にするなつ」高松商船支店での問答遺族は九州邊の人らしい、高松から九州へ歸るに船も汽車も嫌いと云ふ、取り詰めた遺族の心にも涙を催するが、その問答を一

イヤ御尤もと云ふ商船側にも同情する全く

笑つてイ、か泣いてイ、か判らぬ「少しでも早く持ち歸つて お祀りしたらイ、と思ひますか」と云ふ同じ遺族の仲裁で始末がついた

◆大阪のある新聞に若き母……死しても離

さぬ子と云ふ標題に讀んで行くと、それは私の姪の事である姪は二十才、断じて、子は無い覗き込んだ老祖母が「どうしたものだら子供がある筈がないに」沈没の際に、此の子を軽むと渡され、責任感から頼まれて、シツカリ抱いて、口共に死んだのでせう「飛んだ間違ひの記事だノウ」全く泣いてイ、か笑つてイ、か……。

## 街に住めば

高橋かほる

きりぎりすのつがいを入れた籠を買ひました、なと年も昨年も今年も、やつぱり三十錢、値に變りの無いのもまじないがよう利

きそつで嬉しひ。

## 伸びる伯耆

三 鴨 美 笑

ふと目を開けて廻りを見るとシーンとして誰れ一人動く者が無い、時計は五時だ。東を見るも今日も暑いと言んばかりに伯耆大山が赤く染つてそびえている 通勤者に乗せた電車が出始めた米子市へ二十分、夏は美保關で遊ぶと決めた、雨は多い様だがでも楽しい。

## 首を喰ふ

よしだ、すいしや

うっかり、すつばぬくと小松五郎義兼の銘刀でバツサリやられるだらふと 今日迄辛抱してゐましたが、もう時効にかゝつた時分でもあるし、暑さの折柄清涼一夕話として、か

つて 我川柳雜誌社専屬？ 川柳劇壇の大阪公演の時の樂屋のぞ記を一寸お知らせしませう。やはりこつた暑いさ中でした、かほるさんの手しほになる 飛瀑の書割もものは、るでうでるやうな暑さをどう仕様もなかつたのでした、演し物がだしものだけに暑い苦しい扮装や着付け、それでも各役所は懸命でしたから、悲凄又艶麗、觀客を魅了して無事終演、樂屋にとびこんだ忠次親分から勘助淺太郎、おられもないお花坊までが首を喰つたのです。満場を唸らせた各優の熱演もさること乍ら勘助さんの首が、これだけ効果付けたか、その首が皆んなに喰はれたんです、そう言へば當時御覽のお方は覺えてゐらつしやるでしやうが、淺太郎がもつともらしく抱へて來たアノ首首にしてはマルマツチイ過ぎてゐたことを、アレはつまり西瓜なのでした、その上御叮嚀なことには華水丈が寄贈したと言ふんですから、なよそアキレたものです。

## 舊き柳友の

### 激勵に答ふ

平田梢雨

最近の何れの柳誌を繕いても、僕の忘れられない懐しい先輩や柳友の多くが、健在なのに大きな心強さを感じると同時に、その人達の健吟振りに満腔の敬意を表させられる。

自己の作句境に悩み悶えて、果ては永らく柳界から遠ざかつてゐた僕が、漸くにスランブを脱して、川柳雜誌へ投句したら、社の汀柳氏から氏の筆する大阪朝報への原稿を依頼された。依頼されたと言ふよりは、命令されたやうな氣もしたので、原稿を送つたら其れが活字になつた。計らずもそれが、柳友石田沐天氏の知るところとなつて、彼が手紙を呉れた。文章の一言一句に熱い友情の満ち溢れるを知ると、素直な彼がひたむきに僕を激勵して呉れてゐた。

昭和十年の柳界に再び起たむとして、喘ぎ

ながら自己を鞭つ僕に、確りやれ！と言つて呉れる彼の心情が、僕はたまらなく嬉しい。僕がどんなにか感謝して其の手紙を読んだことか――。

――彼と僕とは親しかつた。

曾ての彼は、僕の勤務先だつた書肆へよくやつて来た。堂島仲町の或る喫茶店に熱い紅茶を喫りながら（彼も紅茶が好きだつた）川柳を語る二人だつた。彼の評論は、一刀兩斷だつた。凡そ彼を識る柳友の多くが、彼の痛論には手酷くやつ、けられて、それでゐて魅せられたものだが、おそらく今でも然うだるう――。

何れの社にも屬せず偏せず、活字に句會に飽くことを知らぬ彼の創作力に、僕は無條件に脱帽せざるを得ない。洗練された彼の作品に遠く及ばずとも、僕は彼の期待を裏切れない。

舊友が呉れた手紙のあからさま

好漢石田沐天よ！幸にして健在なれ！

## 川柳の叔父

平井與三郎

泉州堺には大寺と叔父の案山子が居る。

少年の頃より片足不自由にて叔父の一撤から四十過ぐる今日も無妻で年老いた母に孝養を盡してゐられるのは、美くしすぎて、寧ろ淋しい。

痛いのも片足ばかりぢや針の山

尋常二・三年時代、此の句を母から見せられて僕の一家は無暗に感心したものだつた。此の句を題にした綴方を作つて先生にも褒められた事があつた。それが川柳であつたかと思ふと、昔を今に懐しさに堪えない。彼は二十年、夫だ川柳の道を離れず私等兄弟の句に就いて批評下さる喜びを持つて居る。最近私夫婦に戴いた祝吟、

真心は十七文字で結びつき



アバート 住田亂耽選

アバートに氣強く生ず片育ち 崙喜岡萬  
 アバートの眞晝の女無口なり 葉魚  
 一棟のアバートに住む國訛り 禿山  
 村で刈る草アバートの鉢に生け 文庫  
 アバートに噂の主の黒眼鏡 いの助  
 アバートの窓にパトロンらしい影 非常見  
 雨の夜のアバート誰か詩を吟じ 世間音  
 青春をアバートにゐて二食主義 葉光  
 アバートに匂ひの足らぬ女達 紅  
 アバートは酔うて歸つてねるを 徳三

アバートで戀を知る日の鏡拭く 青兒  
 アバートの女は細き眉の朝 水客  
 自力更生すアバートに無事な顔 美代路  
 アバートは年寄の住むとこでさ 烏鬼作  
 高級が崇りアバート寒がらす 如夢  
 アバートのまだ歸らぬ名札を見 四塊  
 アバートに噂をまいて女出る つと夢  
 アバートへ移つてから自暴自棄 龍鳳  
 アバートは當座の愛の巢ときき 曳壺

島 中島鐵洲選

島の名をみんな覺へた出養生 烏鬼作  
 島の灯に遠さかり行く泪なり 蘇堂

川柳家戸籍調 (續)

(係) 縁 雨  
 (1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日  
 (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務  
 先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以  
 外の趣味 (10) 配偶者子供の有無 (11) 嫌ひ  
 なもの (12) 川柳に手を染めた年月  
 (439)

加賀破竹

(1) (2) 本名はあつた筈ですが現在は雅  
 俗共も加賀破竹で通してゐます(3) 明治  
 人間です、三月十三日生(4) 純大阪産。  
 (5) 大阪市東區高麗橋五丁目(6) 昭和川  
 柳社(7) 數多くて規定に従ひ兼ねます、  
 不悪す(8) 曉の色日本ははかけ舟、日本  
 にとれて芽出度い鯛にされ(9) 江戸小唄  
 (10) 定るものはありません(11) 腹にも  
 を溜ること(12) 大正十三年頃

丸島利生

(1) 丸島利三郎(2) 利生(3) 二十六年二  
 月十一日(4) 出生地に同じ(5) 大阪府豊  
 豊能郡南豊島村大字穂積(6) 公務員兼地  
 主、大阪帝國大學病院經理係長(7) 酒と蟹  
 ろり(8) 大空の心かも(麻生路郎)蟹や蟹  
 その反抗が何になる(等原路生)(8) 二重  
 重橋錦の御旗見えて来る(9) テニス、ベ  
 ースボール、圍碁、麻雀、將棋、撞球、  
 魚釣(10) 妻子四人あり(11) たらない人  
 はきくせない事、酒のみ(12) 昭和五年  
 十一月頃大阪醫科大學に勤務の關上教授

よい器量島のくらしにとけ合はす 文 庫

島島を飛んだコースに眼は光り 四五磨

島の娘の黒ひ鬢も魅力にて 正 柳

便船も年に一度の島に生き 菊 路

入陽眞赤く島は暮れて行き 紅

島一つミリタリズムの的になり つと夢

島の美はグラビヤ版になつて出る 今 雨

ライカーへ島の娘の笑つて来 木 履

傳説の島鬍蒼と樹の茂り いの助

乳絞る島のアンコ(娘)の紺緋 青 柿

江の島はビールに少し霞んで来 四 塊

島巡り別れ話しが口に出す 頓知木

島の娘をモデルにしてる落ち椿 葉 光

マドロスの戀あり島に椿咲く 葉 魚

島の娘の惱み女工の募集あり 双 亭

島の妓の訛りも嬉し宿の下駄 葉 魚

島で聞く時計も純な音を立て 久米雄

エキゾチックな島の話にリンゴウ 水 客

小豆島遍路の笠に花が散り 世間音

島へ行く船で寝て居る旅役者 龍 鳳

島巡り琵琶湖の船に酒を買ひ 禿 山

行商の島へ渡つた派手な聲 いわを

島育ち西へ西への浪を見る 禿 山

厭はるゝ病を島に生き残り 夏 生

佳 吟

黒髪は島の姿に束ねられ 水 客

あの島へ何處から渡る船を聞き 都會人

離島金儲がある灯の明り 崙喜固藁

メガホンで叫ぶと島は應へさう 今 雨

島へ来て見れば耕す土地もあり 柳 夢

島巡して役人の數に入り 一 風

要塞地島は夜霧に包まれて いわを

島の妓の誇りマイクの前に立ち 鐵 洲

長崎仙太郎(柳秀)先生の面識を得遂に川柳の手ほどきを受くるに至れるなり。

(442) 狩野柳行兒

(1)狩野信次(2)柳行兒(3)明治三十九年五月十五日(4)東京市京橋區築地(5)東京市淀橋區戸塚町三ノ三六七(6)銀座文祥堂印刷部(7)わが上に屋根のある幸雨の音(三太郎)柿の木は子に待たれつ(赤くなり(唾三味)(8)日の浅い私に自信の匂いまだなし(9)觀る物聴く物なんでも(10)不幸にして妻一人子供二人(11)ムラ氣な選者(12)昭和七年八月

(443) 有田幸笑

(1)有田隆一(2)幸笑、秀去堂(3)明治二十七年二月十三日(4)廣島縣豊田郡吉谷村(5)吳市西谷町四番地(6)吳海軍工廠(7)今朝も又生さねばならぬ酔が醒めのた打つて(8)蛇麩り(8)しわがれた乳房失業苦を搾り(9)書道(號、稻郵)圍碁(10)有り、子供五人(11)鯉の昆布巻、活

動寫真(12)二十才頃、中途四年中絶

(444) 高木夢一郎

(1)高木一正(2)夢二郎(昭和八年一月より)(3)崇木康正(4)愛知縣(5)北海道松前郡福島村字日ノ出(6)小學校教員(7)咳一つ聞えぬ中を天皇旗(劍花坊)陽の方へ向きたい花の願なり(夢枝)(8)新興三人句集の句はみんな自信句であります(9)新興短歌俳句(10)子五人(11)威張る奴(12)大正七年四月



## 柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

【大阪】▲麻生路郎主幹は七月九

日北濱風月堂で開かれた鐵商

二火會席上で川柳講演をされた

同二十五日は阪大川柳會五週年

記念會へ出席さる。▲路郎主

幹指導の阪大川柳會では川柳句

集「大川端」を七月二十五日天

神祭の日に刊行さる、柳秀、路

生、筑川、湧三、洗塵、青一路

氷炭、方正、たけな、千秋、正

甫、貞三、利生、橙舎、芳一、

葉、山彦諸氏の創作と路 師の

序文及席題句抄がある。四六版

二百頁、發行所大阪市住吉區玉

出本通三ノ三六不朽洞▲本社支

部行人會は七月二十五日濱寺海

水浴場へ川柳遊泳を催した。▲

本社益ヶ地支部の「篝火」及び

石森靜太君の「檣」いづれも終

刊を宣された。▲増位汀柳君へ

本社編輯長)は大坂歌舞伎卓球

場顧問を依頼された。▲青木史

呂君(本社同人)は辨天座廣告

研究會にて川柳の廣告化を提案

して入賞、九月二十一日より大

峯登山へ。▲番傘川柳社を退社

した彈古、紫朝、鳥歌、塊人、

百雷、破竹、七絲、芽十、夕蠅

の九氏が昭和川柳社を興し七月

一日會報第一號を發行された。

▲植山九天君(本社同人)は七

月二日の鐵道庭球大會に大阪鐵

局庭球部監督として東上さる。

▲番傘を脱退した人たちで成つ

た昭和川柳社の第一回川柳ピク

ニック野崎語りを七月七日に行

はる。▲本社大鐵支部畔柳社七

月會は廣島新鐵道局へ轉任さ

れる天八、ひさし、村夫子、芳

松四君の送別を兼ねて十一日盛

大に催された。▲本社御池橋支

部七月涼み會は十七日夜日本

樂器會社で催された。▲本社玉

造支部七月會は二十一日夜岸

男前製造所に於て催された。▲

塚越正光君はさやり吟社の社人

とし、復歸、關西方面に活躍を

期されてゐる。▲高島屋池澤丈

雄氏編輯の雜誌「笛」十月秋燈

讀物號より柳壇を新設綜合文藝

雜誌としての眞面目を示す事と

され本社主幹麻生路郎先生を選

者として迎へられた。▲番傘川

柳社では九月柳翁忌前に大阪三

越で川柳展を開催の計劃成る。

【東京】▲宮尾しげを氏其の他有

志の方々の文樂繪展覽會を日本

橋高島屋八階サロンに七月九日

から十五日迄催さる。▲前田雀

郎氏(本社客員)主催の七月十

四日淺草雷門の末弘にて不用、

持寄り交換市川柳「蚤の市」を催

さる。▲福田山雨樓君(本社同

人)は七月十一日公用で桐生へ

出張、二十一日日本社事務所を訪

問、路郎主幹、初め紳樂、汀柳

春秋、與三郎君と懇談さる、住

所は再び横濱市保土ヶ谷區保ヶ

谷町三三へ轉居。▲故藤田珍

菜坊君追悼會は柳友會主催で

八月十一日豐國河岸朝日俱樂部

で催されると。▲和田天民子撰

「川柳昭和九年特選集」が川柳俱

樂部社で發刊された、定價一圓

發行所牛込區拂方町一四、其社

【京都】▲京都朝日柳壇創設七周

年記念川柳大會 朝日柳友會主

催で八月四日木屋町民政會館で

催さる。

【兵庫】▲長島双亭君は兵庫縣芦

屋三條五反田六八、大橋力方へ

寄寓。▲鈴木嘉一君は二潮と新

雅號を路郎主幹に名付らる。

【廣島】▲町田承春君（竹原支部

幹事）は七月八日四國靈峰石鏡

山へ登られる「溪流の岩に砕く

る物凄さ」雷鳴を足下に聞いて

山を下り」

【石川】▲津幡の興津同好會は七

月十五日三國山登山をされた、

「松の木の上的眺めと詩人ぶり」

義風子。▲高村綠峰君（りゅうじ

ん街同人）は七月十三日來本阪

社事務所を訪問さる。▲金澤川

柳聯盟の結成記念懇親會は七月

二十日に催さる。

【鳥取】▲本社伯耆支部七月旬會

は三日に催された。

【島根】▲本社鯉川支部の大地吟

社及鯉川第二部の高松吟社の諸

君の努力により鯉川柳社へ起

し「鯉川」創刊號を七月十五日に

發行された。一部五錢、島根縣

今市町一二八八尼縁之助方が事

務所となつてゐる。

【高知】▲筒井珍景君は水魚に改

號。▲本社高知支部七月例會は

二十一日夜カフエーブラジルで

催された。

【愛媛】▲本社今治支部は村上源

氏遺句集目下編輯中。▲曾我部

啓明（今治支部幹事）の令妹七

月十五日朝早逝せる哀悼に堪え

ず。▲今治の原田一風君は四國

願拜中歸途高野山より大阪に寄

られると。

【福島】▲大谷五花村氏（本社客

員）は那須音頭を作歌されたが

今般佐々木俊一君の作曲で振付

も出來上り其披露會に招かれ七

月二十日那須溫泉へ。

【長崎】▲山川草木君長崎市御船

藏町一七番地に移轉さる。

【海外】▲阪大川柳會の關根山彦

博士は歐行中であるが、路郎師

宛の書信には必ず川柳を盛られ

てゐる熱心ぶりである。

【静岡】▲静岡地方の震災は幸に

して川柳家全部無事である由、

榎田珍竹林氏より見舞御禮と情

報があつた。

【北海道】▲札幌の高橋非常兒君

は東京市荏原區上神明町三五一

長谷川久子方へ轉居。

### 川柳指導講座

課題「わが友だち」

一人一句

選者 川上三太郎氏

「わが友だち」といふ六文字

に捉はれず、友人に就いて

の一切を自由に十七字見當

のものにして下さい。

一切 八月二十日

發表 拾月號

投句 本社事務所

### ◎前號訂正

▲明治以後の川柳年表中、二十

六頁山柳解は川柳解二十七頁等

二號は第二號、二十八頁効稚園

は効稚園、二十九頁ともゑの最

下第六號は不要、後では從て

# 各地柳壇

いちのあを創る



路鼎・柳汀・柳樂・整理

## 本社七月例會

七月十日夜

於本社會館ホール

祭月の大阪。涼風競ふ高臺の上本町の本社浴衣がけの寛いだ旬席、暑さにめげずの盛會に柳樂氏の「枕詞と上五」の熱演、兼座談會後路郎師の肩の凝らない、漫談的な川柳の話があつた、前後共に味ふべきところ多々あり宛ら營養と渴を慰する事冷しビール之感があつた。(與三郎)

出席者

路郎師、汀柳、與三郎、柳笑、世間音、美代路、鐘生、かほる、角嵐、正光、天國、双魚、春秋、句大夫、住雄、柳樂、沐天、青兒、夢裡、三碧、郡島、泊童、鮑魚、樟二、滿潮、德三、破鼓、絲雨、素月、雨迷、機見女、久那、四五磨、雞牛子、彩泡、禿山、みつる、里十九

### 席題 祭

互選禿山披講

素麵ですます祭の晝御飯

三碧

燈籠に電氣を入れる夏祭

天國

モの居る方へ御神輿ゆれて來る

沐天

夏祭十供の下駄に起こされる

素月

店員の軽い姿も夏祭り

同

お祭りだ子供だけは着せてやる

同

御渡りの音だけ見える若松町

禿山

夏祭り袂が長いおとなしき

同

夏祭り汗を溜めてる猿田彦

同

夏祭り踊る我が子へ氣を取られ

柳笑

目の見えぬ子がいちらしい祭の灯

句大夫

宮入の神輿がねばる鳥居ざわ

世間音

祭太鼓病む兒へ少し窓をあけ

美代路

夏祭格子の中は碁を圍み

柳樂

### 席題 瀧

雨

迷選

瀧壺の泡の行方が面白し

三碧

### 投稿 清規

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載すること
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月末日とす
- 五、投稿先は本社事務所

瀧道で遠足隊は二分する  
瀧の音凄く聞いている夜の冷え  
ハイヤング 休みする瀧に來る  
瀧壺へ俳號のある友と立ち  
瀧の音純な二人へ希望湧く  
本心を瀧へ來てからきく旦那  
道問へば瀧あることも教へられ  
寫真屋のレンズは瀧に向いたきり  
鮎を焼く香ひに瀧の音がする  
瀧の飛沫へ濡れて嬉しい二人居る  
瀧へまで行かず河尻を聞く浴衣  
水害の噂淋しい瀧の茶屋  
瀧壺の音さへ瓶を投げつける  
(人)瀧少し見えて子供は走りま  
地)寝つかれぬ旅の夜の汗瀧をき  
天)下流での紛議も知らぬ瀧の音  
(軸瀧)なる水は妖魔をはらみち

句大夫 柳笑 禿山 角嵐 棹二 破鼓 美代路 泊童 柳樂 雞牛子 住雄 德三 與三郎 同 住雄 德三 雨迷

席題 硝子器

縁 雨選

硝子器の水菓子に太い手が出兼ね  
デパートの硝子器にある夏の艶  
硝子器の横へほこりの目立つなり  
硝子器の高そうなのもならび  
硝子器へ乙女ダンスの足りつり  
硝子器の蠅を追つてゐる閑な店  
硝子器へ登の青さが匂ふなり  
ガラス鉢やつことうが冷き居る  
シロツプが女の息に減つて行く  
うれしさはコツプにある生ビール  
忘られたヤキマンの皿朝となり  
カソツグラス洋酒を注ぐコツプも  
硝子器もマダムの好きなせいじ色  
カソツグラス先づ舶來かと思ひ  
硝子器の艶へ少々飲み過ぎ  
硝子器の奴きたなう食べ残し  
硝子器の何かを入れて飾りたし  
硝子器へ衝突をする箸と箸  
硝子器へ勉強の手がのびて来る  
硝子器へ盛るとくだもの艶を見せ

心太女 心太 太 かほる 選

自由郎

破鼓

久郎

かほる

素目

滿潮

與三郎

句太夫

同

同

心太こから白い道を踏み

心太ついてお岩の話する

心太團扇を添へてすゝめられ

平紐の様に出来て来る心太

心太上に小さい水車

冷酒ちと様子のちがふ類でのみ

冷酒へ妻の素振りが氣にくはず

冷酒が染つたらしい診断書

決心がついた冷酒ぐつとのみ

日本の冷酒グラスでうけさせる

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

實現の可否はさておき避暑プラン

避暑地から馬鹿にしきつた便

ポータブル物干で鳴る避暑気分

避暑地からビルの机へ淋しがり

爪の色今年も避暑は山を決め

避暑先もやつり暑い扇風機

避暑先へ女將目立ぬ髪でくる

避暑先の一家目輪にされてゐる

息子だけ残して避暑が引あがる

ウナ電へ避暑の社長すつ裸

双魚

角嵐

青鼓

破鼓

同

同

同

同

同

同

川柳 松江句會 (松江)

六月五日夜於天神ミドリ喫茶園  
兼題 エブロン

エブロンは涙を受けるものであり

エブロンが氣になる女中年を知り

エブロンが掛きかえつた夕べです

二選

夢迷

比呂志

磨須雄

錦葉

同

同

同

同

同





熱狂の祭の夜の月青し  
 熱狂をすれば夕立雲が飛び  
 熱狂は靈兵の立つ線に出る  
 (佳)熱狂を浴びて大關胸が割れ  
 (同)熱狂のラヂオ破れるかと思ひ  
 (同)熱狂の續き二人連になり  
 (同)繩張りを越して熱狂叱られる  
 (同)熱狂をすればコップの水が  
 同 熱狂をすればコップの水が

卒業へ母が誘つた寺詣り  
 山門を廻れば鐘樓暗く立ち  
 豆腐屋にまだ借がある寺男  
 寺の前意見の違ふ人と會ひ  
 孫の手を引いてお寺の庫裡を出る  
 (軸)男衆の力へ寺は夕暮れる

兼題 響  
 サイレンの響を得意先で聞く  
 かたくな老を響かず煙草盆  
 泣き聲も一所に響く電話口  
 我が胸に響く物あり大捕公  
 (軸)街の灯とひびきと娼婦嫌ふな  
 川 柳 高知句會 (高知)  
 雑誌社  
 六月廿一日カフエーララツル樓上

席題 梅 雨 珍 景選  
 蚊やりする煙にむせた梅雨の宿  
 長靴の黴拭いて出る梅雨の入り  
 表具屋の手先に梅雨はもう來てる  
 物干へ子の物ばかり梅雨は晴れ

梅雨けふも儲けにならぬ客が來る  
 (軸)梅雨少し晴れ見え降り續き  
 席題 母 白  
 母上の寫眞は眩しきうに居る  
 歸省して母の小さい歸を見る  
 (人)出世なさざらぬ母と縫ひ續  
 (地)母親の両手はいつも濡れてる  
 (天)功成つて母の苦勞をいたは日  
 席題 火 山 春  
 三原山今日も下駄だけ拾はれる  
 凶作へまだ火山灰は降り  
 跳び込めば二人が死れる噴火口  
 噴火口おつと危い唾を呑み

兼題 尺 八 濁 水選  
 虚無僧宵の廊で儲けて居  
 尺八は静かに吹いて娘と二人  
 尺八は戀を忘れた顔である  
 尺八の音色は大工とは見え  
 更生を誓ふ尺八涙えてゐる  
 尺八に我家の月も悪くなし  
 尺八は静座法から吹きはじめ  
 (人)尺八へ嬉しい息が續くなり  
 (地)尺八の本音が吹ける顔を撫で  
 (天)尺八のひざが震へていま佳境  
 (軸)虚無僧をさとりてる手をこぼれ

川 柳 今治句會 (今治)  
 雑誌社  
 六月二十七日 宵 明 報  
 本春以來幹事病氣のため過去月二回の句會  
 の歴史を失つた事は淋しい  
 本月からより以上の復興を期する

席題 梅 雨 珍 景選  
 蚊やりする煙にむせた梅雨の宿  
 長靴の黴拭いて出る梅雨の入り  
 表具屋の手先に梅雨はもう來てる  
 物干へ子の物ばかり梅雨は晴れ

幹 事 宵 明選  
 支關へ幹事の下駄が見當らず  
 幹事だけ残つてゐる酒をのみ  
 團體旗がついて幹事汗をふき  
 二次會に成つて幹事は酔ふつもり  
 受付を幹事での妹引受ける  
 (人)自動車で送り幹事の酔が出る  
 (地)幹事又運轉臺に乗つてゐる  
 (天)幹事まだ宿の浴衣が着れぬ  
 (軸)箸とつたとこを幹事は又呼  
 病 床 曉  
 病床へ今日も花束とけけられ  
 病床へ夏の陽射しがまだ高い  
 花束の主へ看護婦氣をきかせ  
 (佳)病床の壁向いた瞳が濡れて  
 (同)病床の日永へ雲が動かない  
 (同)病床の目永へ雲が動かない  
 (同)向むきに寝た束髪さびし  
 妹永く病みて  
 (佳)教科書の名を書いた床に  
 (軸)看板の風粉薬の時間なり  
 全 快  
 全快のみんな揃つて神參り  
 全快の部屋一つばいに風を入れ  
 全快は時計の紐をかえてみる  
 全快の瘦せた身體をかけてみる  
 (佳)全快へ椅子と机のなつかしさ  
 (同)全快の腹へお粥のもの足らず  
 (人)全快の眼をむらせるおはき餅  
 (地)全快はバンドの穴へしたし  
 (天)全快の類へ剃刀こころよし

兼題 響  
 サイレンの響を得意先で聞く  
 かたくな老を響かず煙草盆  
 泣き聲も一所に響く電話口  
 我が胸に響く物あり大捕公  
 (軸)街の灯とひびきと娼婦嫌ふな  
 川 柳 高知句會 (高知)  
 雑誌社  
 六月廿一日カフエーララツル樓上

席題 梅 雨 珍 景選  
 蚊やりする煙にむせた梅雨の宿  
 長靴の黴拭いて出る梅雨の入り  
 表具屋の手先に梅雨はもう來てる  
 物干へ子の物ばかり梅雨は晴れ

席題 梅 雨 珍 景選  
 蚊やりする煙にむせた梅雨の宿  
 長靴の黴拭いて出る梅雨の入り  
 表具屋の手先に梅雨はもう來てる  
 物干へ子の物ばかり梅雨は晴れ





四月二十七日

席題 枕

枕二つ並べて下女は引き下り  
子を起すまいと手枕寝てしま  
断髪の氣安う枕を外して  
髪結ふて今宵の枕つかれず

席題 遠慮

遠慮なくと出された菓子に遠慮  
遠慮した様に見えるが知らぬなり  
酒呑みの始の遠慮ごこへやら  
遠慮する柄でも無いと酔はされる  
遠慮がすぎて氣ますう別れて來

兼題 印刷

號外のインキ乾かぬまゝに來る  
輪機明日の世界を作つてる  
輪轉機明日へくと廻ひ續け  
印刷屋誤植を數へ直切られる

兼題 釣

釣をする前をボートの遠慮せず  
浮標沈む氣持に釣の止められず  
水際で大きく跳れて鯉は逃げ  
釣れる間をしぼし忘れる失業苦  
釣れ出したとこを曳船唄で過ぎ

五月四日

席題 腰

腰のばす暇なく夢を刈り進む  
洋装の腰へはつきり線を出し  
急停車思はぬ人に腰をかけ  
米壽の賀其の腰つきをほめられる  
酔ふて寝た腰へ座蒲團掛けられる

五選

路風 文月 いその 眞作 牛歩

樂選 いその 眞作 牛歩

樂選 川舟 欽央 高橋 岡本 眞作

五選 川舟 眞作 眞作

五選 眞作 眞作

席題 掃除

日曜日掃除と聞いて用事出來  
大掃除向ひの店へ遠慮なく  
病床の妻の差圖で掃除すみ  
飛行機へ靴の掃除の手をや  
大掃除妻のまめしさを知り

兼題 肌

衰への肌につくく見入つて居  
幕間の樂屋はみんな肌を脱ぎ  
あの顔の割には惜しい肌を持ち  
瀧の音近くに聞いて肌を入れ  
(秀)子の肌着蚤一匹へ指がより

兼題 小言

この始末やがて小言の種になり  
客が居て云へぬ小言は目で叱り  
御近所の小言へ母は持てあまし  
サホル氣で小言を後に家を出で  
お褒りの小言に夜も更けるなり  
先づ獲りてからの小言に逆らはず  
(人)飲み込んだ小言は軽く詫び  
(地)お茶漬へ小言の交る膳につき  
(天)みじめさは小言も云ふ世帯

五月廿五日

席題 土ほこり

小言をば聞く縁側の土ほこり  
失業の無駄足踏んだ土ほこり  
大阪へ道は三里の土ほこり

兼題 扇

高砂や扇持つ手のきこちなさ  
あくびをば扇の影ですましてる

五選

森岡 川舟 眞作 路郎

耶選 耶選 耶選 耶選

磯野 榮山 幸多樓 たけし 眞作

川舟 眞作 遠見寺 森岡 眞作

直坊 眞作 眞作 眞作

團長の扇子で煽る應援歌 眞作

團長の扇が見立つり一々戦 幸多樓

寫眞屋は扇持つ手を直しに來 同

(軸)王手飛車扇大きく使ふなり 眞作

兼題 夜店 眞作

半値からそろく夜店値をつける 路風

詰將棋あきらめきれぬ夜店の灯 遠見寺

庭下駄のまゝて夜店を一廻り 阜月

夜店からしのぶを提げて若夫婦 文月

夜店の灯僻けて艶歌師唄ひ出し 眞作

母と來て夜店の妙薬一つ買ひ 同

戀語るボートに遠い夜店の灯 幸多樓

(軸)夜店でもひやかして來る箸を置き 眞作

つごひ (第廿六回) 眞作

吉田水車報 夕鐘

裸同志へ氷が届くなり 水車

裸から裸へ渡す女風呂 眞作

永平寺、東澤坊めぐり 眞作

六月九日 水谷鮎美報

新緑に菊花輝く永平寺 眞作

若僧のまるき心の庭掃除 眞作

坊さんに電話がかゝる永平寺 眞作

説明の僧の眼鏡の度が強し 眞作

新緑の陽射しへ菊花御紋章 眞作

絶景にあきすピールの栓をぬき 眞作

岩頭へ繪葉書賣る娘がついてくる 眞作

海女もぐる東澤坊の波白ろし 眞作

# 川柳書架 (五五)

川柳 大川端

丸島利生 編

▼麻生路郎氏は序文の一節に左の如く述べてゐる。

▼句集「大川端」の挿稿は阪大川柳會で一度私の選になつた句ばかりであるが、斯うして箇人々々の句を一例に再選して更にその人々の心の奥深く觸れ得た感がある灰色の街—大阪にこの句集のあることをこゝろからよこごびたい。

▼更に本書の「まへがき」を轉載すると昭和六年夏水都の豪華版天神祭の夕々々の聲を擧げた阪大川柳會もやつと五歳になつた。虫氣もなく癩疹にも罹らず兎に角これまで成長して來た記念として同人の句集を刊行する事にした。此の間産婆となり嫁婦となり常に御援助下さつた長崎笠島兩博士及び育ての親として一方ならぬ御世話をおかけした川柳雜誌主幹麻生路郎氏に對し茲に深甚なる感謝の意を表す。  
昭和十年七月二十五日阪大川柳會  
▼昭和十年七月二十五日印刷昭和十年八月一日發行四六版二〇〇頁非賣品、編輯

兼發行者大阪府豊能郡南豊島村穗積二十八番屋敷丸島利三郎、發行所大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地不朽洞  
▼佳吟に富む。編者は大阪帝國大學醫學部附屬醫院の計理課長で阪大川柳會の幹事である。

## 北米川柳

本田華芳 編

▼本書の巻頭言に西島〇丸氏の「創むるに易く續くるは難し」、八十島杜若氏の「三鞭をぬいて」がある。

▼編者本田氏の序文から抜くと、「北米川柳互選會が初めてシヤトルに生れましてからもう。六年目になります忘れることの出来ない第一回互選會は千九百二十九年の夏、七月二十一日でした。會場は當時名高かつた丸萬亭、出席して下さつたのは松亭、みどり、洋花樓、玄界の方々を私を加へて五人でした」

(中略)今五十回記念出版を致しますに當り、會員諸氏の不斷の御援助を感謝致しますのは申迄ありませんが、特に記したいのは雀喜、柳雨の御兩人が非常に互選會へ助力されまして今日の發展を見ましたこと、劍突、白津の方々御盡力

でヤキマ地方に川柳が益々發達して行きますことに對し、改めて感謝させて戴きたいと存じます。(以下略)  
▼昭和十年二月十三日印刷昭和十年二月十五日發行。四六版三六一頁、非賣品、編纂者本田新次郎、發行所北米シヤトル市メーン街五二二北米川柳互選會

### 日本名所物川柳

投句募集

東京の巻 選者 前田雀郎氏

(七) 泉岳寺 三句

(八) 上野 三句

(八) 上野 三句

四國の巻 選者 前田五健氏

(一) 松山城 三句

(二) 金比羅 三句

(二) 金比羅 三句

宛先 本社事務所

用紙 ハカキに限る

九月十五日

九月十五日

# 編輯の窓

柳 汀

▼同人諸君から回答じて貰つた「生れた家に就いて」は三十九人と云ふ好成绩

で面白いものが集つた、特輯號讀物として涼味が満喫されるであらう。

▲路郎主幹はあの忙しい仕事のために随分と疲勞されてゐるのにも拘らず、元氣に編輯部員を勵まし執筆を續けられるのは何よりも有難い。

▲川柳塔の組方は前號に行間を擴げたが、更に一二句を減らしてゆとりを作つた事はお眼にとめられたい。

▲本號より連載される梅本塵山

氏の「當世不通漫談」は不通どころか、仲々もつて下手な現代漫談なんかと同一視すべきものではない、正に當世に得難い漫談として傾聴を願へるもの。

## 暑中御伺

不朽洞

麻生路郎  
麻生菫乃

育んで頂けることは請合である▲品川陣居氏の明徹な論評を得たのと、山川花戀坊氏の雜筆とで東都柳壇の人々が本誌を賑はしたのも近來にない異色である

神社の祭禮に當り、月評終了後、神樂氏鑿應のピートルに春秋、與三郎君と私が柳論にメイトルを擧げた。

▲本社句會は例年の通り八月は休會であるが、それに代るべき「川柳屋上ピートル會」を別項の如く十一日夜本社屋上で催す事となつた。涼しい高臺で句作する爽快さを味ひにぜひ御参加をお奨めする。

▲路郎主幹は講談俱樂部「一月」に掲載の川柳選者を依頼されたべ切は八月末日で課題その他詳細は同誌九月號に發表される事となつてゐる。

▲川上三太郎氏の川柳指導講座は、子供の好きな三太郎氏の親ごころが充ち溢れ、鏡さの中に優し味のある筆致に、川柳の子供たちを無性に嬉ばせ、立派に

▲月評はいつも事務所で作るが、今度は神樂氏宅で行つた、同氏邸も東區元伊勢町であるから、「街の高臺」の名に背かぬ土地柄である、殊に其日は玉造稻荷

▲本號の編輯には路郎主幹が態々出版社されたのと神樂、春秋、與三郎君等が援助されて灼熱ものかわの元氣であつた。

# 川柳雜誌案内

六號活字十四字面三行金五十錢、一行増すと  
 七號活字十四字面三行金六十錢、一行増すと  
 八號活字十四字面三行金七十錢、一行増すと  
 九號活字十四字面三行金八十錢、一行増すと  
 十號活字十四字面三行金九十錢、一行増すと  
 十一號活字十四字面三行金百錢、一行増すと  
 十二號活字十四字面三行金百五十錢、一行増すと  
 十三號活字十四字面三行金二百錢、一行増すと  
 十四號活字十四字面三行金二百五十錢、一行増すと  
 十五號活字十四字面三行金三百錢、一行増すと  
 十六號活字十四字面三行金三百五十錢、一行増すと  
 十七號活字十四字面三行金四百錢、一行増すと  
 十八號活字十四字面三行金四百五十錢、一行増すと  
 十九號活字十四字面三行金五百錢、一行増すと  
 二十號活字十四字面三行金五百五十錢、一行増すと  
 二十一號活字十四字面三行金六百錢、一行増すと  
 二十二號活字十四字面三行金六百五十錢、一行増すと  
 二十三號活字十四字面三行金七百錢、一行増すと  
 二十四號活字十四字面三行金七百五十錢、一行増すと  
 二十五號活字十四字面三行金八百錢、一行増すと  
 二十六號活字十四字面三行金八百五十錢、一行増すと  
 二十七號活字十四字面三行金九百錢、一行増すと  
 二十八號活字十四字面三行金九百五十錢、一行増すと  
 二十九號活字十四字面三行金一千錢、一行増すと  
 三十號活字十四字面三行金一千五十錢、一行増すと

## 製並合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷  
 より十卷まで

各壹卷 金壹圓五十錢  
 大阪市内送料 壹冊 六錢  
 市外送料 壹冊 廿四錢

大阪府天王寺區上沙町一丁目五  
 川柳雜誌社

## 懸賞川柳募集

題「髮」 路郎 選  
 八月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ (化粧柳  
 壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す  
 ▼投吟所 麻生路郎氏宛  
 大阪市玉出本通三の三六  
 化粧新聞社

# 川柳きやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豊島區高田本町二の一  
 四六八 川柳きやり吟社

(取次所) 川柳雜誌社事務所

## 紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

舟 五句

八月二十日

大阪府西成區玉出本通  
 三ノ三六  
 麻生路郎氏宛

## 朝報柳壇

選者 増位汀柳

題「アパート」八月十五日  
 題「時計」八月三十日

雑吟は八月十日締切  
 大阪府天王寺區上沙町  
 一丁目 増位汀柳宛

毎日必ず川柳の記事が出てゐる  
 大阪朝報をお讀み下さい  
 (一ヶ月五十錢、開設費六十五錢)

## 川柳雜誌

投句用箋

本社規程の投句用箋を左の通  
 りてお頒ち致します。投句用下  
 はなるべく此用箋を御使用下  
 さい。

五十枚綴 一冊 金拾貳錢  
 (送料共)

御申込は本社事務所  
 (切手代用可)

## 川柳屋上ビール會

川柳雜誌社會館屋上  
 上本町四丁目八番(從前所)西へ半丁左に見ゆる洋館

一、會場 八月十一日(日曜)午後七時

一、日時 八月十一日(日曜)午後七時

一、兼題 「ビール」浴衣」各三句 路郎選

○出席者全部に森東魚氏執筆の川柳マツチを呈上  
 ○當日漫畫家小川武氏も出席その情景を描かれます

會費 金七拾錢(簡單な料理とビール付)

主催 川柳雜誌社

## 川上三太郎主宰

(毎月一回發行)

## 川柳研究

一冊 金廿錢  
 半年 金一圓  
 一年 金二圓

異色ある本誌の創作欄  
 と初心者への入門欄を  
 アナタは絶対に見逃し  
 てはいけません

見本希望者は二錢切手十枚  
 同封左記へ

東京市王子區上十條町八五〇

發行所 川柳研究社

## 光耀八月例會

場所 キング喫茶室  
 南海線玉出驛下車  
 本通十五間道路路北ノ辻  
 西入

日時 八月廿日(火曜)午後六  
 時半

兼題 「蟬」「蚊帳」  
 各題十句以内

會費 參拾錢(遠方の方の兼題  
 に投句歡迎)

主催 川柳光耀會  
 幹事 竹内機見女

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第十號課題

八月五日締切

(各題十句以内)

▼寺

福田 山雨樓選

▼火鉢

竹内 機見女共選  
姫田 夕鐘共選

第十二卷第十一號課題

九月五日締切

(各題十句以内)

▼指

西田 艸 樂選

▼雫

喜多 春 秋選

每 號 募 集

▼近作柳樽

麻生 路 郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切は事務所宛

定 價

一 部 金 參 拾 錢  
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢  
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年 七月廿五日印刷  
 昭和十年 八月 一日發行

第十二卷 第八號  
 (毎月一回一日發行)

禁 無 斷 轉 載

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一郎  
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地  
 發行 所 川 柳 雜 誌 社  
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地  
 電話天下茶屋二五七九番  
 事務所 大阪市天王寺區上沙町一丁目五一番地  
 電話南六四四番  
 振替大阪七五〇五〇番

川 柳 雜 誌 社

寶 樹 書 店

(大阪) 大寶樹 大寶社書店 | 明文堂 其他 市内 各書店 |  
 (東京) だん 東京堂 かん 嚴松堂 やう 吉岡書店 あさ 玉森堂 ぎん 紀  
 伊國屋 さん 三味堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚 (京  
 部) 三宅 (名古屋) 靜觀堂



喫茶とサンド井ツチ

街の茶寮

大毎の北横西入

まん朝

南地相合橋筋南  
芦邊劇場裏手

即席御料理・にぎり・天ぷら

電話戎1531番

和洋酒 & 喫茶

生ビール 付 出

今里新地

半

吉

電話天王寺二八一六  
今里公園通り西角

氣分本位の

新地スタンド

北新地東入口角

暑 中 御 伺

池澤樂居

大阪府高石町北六二六

大阪帝國大學醫學部

長崎柳秀

欣臈居  
前田五健

松山市真町二二

富士野鞍馬

東京市杉並區高圓寺  
六ノ六八五

福田山雨樓

勤務 東京鐵道省 工務局 人事  
住所 橫濱市保土ヶ谷町三三三

西田艸樂

大阪市東區元伊勢町  
昭和園

山本雨迷

大阪市東區中津濱通  
一目二  
丁  
電話北三八〇五番

增位汀柳

大阪市天王寺區上汐町一  
電話南六四四番

高橋かほる

大阪市南區北炭屋町二〇一  
電話南五九六番

生田翠夢

大阪市東區粉川町一六

住田亂耽

兵庫縣武庫郡魚崎町五九八ノ二

中澤濁水

高知市本與力町

暑 中 御 伺

<p>福田 鶴峯</p> <p>大阪市天王寺區 北河堀町六九</p>	<p>螢ヶ池支部</p> <p>川柳雜誌社</p>	<p>三鴨 美笑</p> <p>川柳雜誌社 伯耆支部</p> <p>鳥取縣西伯郡手間村</p>	<p>尼 綠之助</p> <p>川柳雜誌社 兼川支部</p> <p>大地吟社 鳥根縣今市町</p>	<p>中島 鐵洲</p> <p>鳥取市川端町一丁目</p>
<p>北島美代路</p> <p>柳 月 庵</p> <p>大阪市北區曾根崎上四丁目三</p>	<p>多田 玉葉</p> <p>大阪市港區八幡屋鋪町 一八七ノ一 船山方</p>	<p>町田 承春</p> <p>川柳雜誌社竹原支部</p> <p>廣島縣竹原町</p>	<p>吉田 水車</p> <p>名古屋市東區南大津町一 共濟ビル内山武商會出張所</p>	<p>北山 悟郎</p> <p>大阪市東淀川區本庄 川崎町三ノ二三</p>
<p>荒井英賀夫</p> <p>愛媛縣西條町新町</p>	<p>西村 山月</p> <p>大阪市東成區深江町 九九九</p>	<p>竹内 機見女</p> <p>大阪市天王寺區寺田町三</p>	<p>須崎 豆秋</p> <p>大阪市住吉區旭町 三ノ一四</p>	<p>杉谷 湖山</p> <p>鳥取市職人町</p>
<p>植山 九天</p> <p>兵庫縣川邊郡小田村 潮江堂ノ後ノ一四</p>	<p>金泉 萬樂</p> <p>尼崎市東樫木町四二</p>	<p>原田 一風</p> <p>今治市北門通</p>	<p>鈴木 一潮</p> <p>兵庫縣魚崎町山星本店</p>	<p>岡田 某人</p> <p>神戸市須磨區飛松町 五ノ二二</p>

暑 中 御 伺

川柳雜誌社住吉支部

奥野 禿山

住吉區 住吉町 一六四

新見世間音

浪速區元町四ノ二三五

月刊

川柳ビル

一部 拾錢

京都市上京區葎屋町  
出水北入 安平方

川柳ビル  
同人 一社

今秋の臺灣博覽會に渡臺の柳へは今一足を延して臺中をお尋ね下さい。お知らせ下されば驛迄出でゆきます。

臺中市榮町一ノ二

宮内 耕朗

山本 丹路

大阪市 住吉區  
帝塚山中二ノ三八

原史風

大阪市 旭區 赤川町  
八丁目 三八一

毛利 九波

大阪市東區道修町五ノ三  
四 (電話本局一五六四)

川柳雜誌社神戶支部

西村 明珠

林田區七番町四五

山田 貧兒

林田區松本通 六丁目  
八〇(沖方)

八薙 刀郎

神戸區中山手通七丁目  
一七七

小原 吉左右

湊區湊川町五丁目  
廿三ノ一〇

喜多 春秋

兵庫區三川口町三丁目  
一〇八

眞田 幸捐

神戸區再度筋町九五

首藤 竹楓

葦合區野崎通 二丁目  
三九(事務所)

日野 華水

神戸區中山手通七丁目  
五四三

暑中御見舞

平 井 春 光

港區東田中町四ノ七四

近 藤 双 魚

三島郡千里村大字馬谷  
九 一 七 地

青 木 史 呂

鶴見橋通五ノ四地  
吉 田 方

林 住 雄

東區南木町四ノ四〇地  
正 木 屋 方

平 井 與 三 郎

大正區大正通六丁目

平 井 瀬 津 女

大正區大正通六丁目

川柳雜誌社行人會

川柳雜誌社 暑中御見舞 同人會

大阪市港區西田中町四〇四  
姫 田 夕 鐘

大阪市南區疊屋町六  
永 田 里 十 九

大阪市東區平野町御靈神社  
南一丁  
(經營)喫茶酒場ミスミドウ  
樋 口 坊 茄 子

大阪市西淀川區大和田町  
二九一  
松 枝 靜 波

大阪市此花區春日日出町  
中四丁目九番地  
天 野 卜 居

尼崎市外小田村今福字滿上  
六六の五  
榮世改め  
増 元 翠 陽

尼崎市難波新町の一〇二五  
川 村 觀 月

兵庫縣武庫郡大庄村西  
字東之口一二七  
辻 遊 步

兵庫縣武庫郡大庄村西字口開  
一八一  
水 谷 鮎 美

暑中御見舞申上候

川柳雜誌社今治支部

今治川柳俱樂部

渡 邊 曉 童

今治市大坪通三丁目

谷 心 府

今治市米屋町一  
伊豫相互支店內

曾 我 部 宵 明

愛媛縣越智郡櫻井町

長 野 文 庫

今治市神明町東洋文庫

在 間 小 樓

今治市南堀通  
二 業 內

平 井 藤 生

今治市南堀通  
松 久 內

暑中御伺申上候

川柳雜誌社鶴町支部

松 下 小 柳 子  
宮 岡 白 峯  
妹 尾 變 人  
關 木 雅 幽

暑中御伺

阪大川柳會

暑中御伺

大島濤明

大連市西公園町川柳居平洞

電話 自宅 三七一三番  
振替口座大連二五六五

暑中御伺

大阪市南區疊屋町六番地

喫茶  
洋食  
支那料理

力 十 又

店主 永田賢次

號 里 十 九

暑 中 御 伺

併せて關西の皆様へ過日の水害お

見舞申上ます

滿洲國熱河省凌源小西街

(電話一二六番)

カフエーモタン

岩 崎 柳 路

岩 崎 松 代

康德貳年七月

暑 中 御 伺

橋 本 綠 雨

橋 本 美 奈 子

大阪市住吉區平野西之町八三  
電話 天王寺 一一六七番  
振替 大阪 二九四五九番

川柳雜誌社御池橋支部

村 松 夢 裡

住吉區住吉町一七二七

後 藤 青 兒

東成區生野ヶ丘

西 い わ を

住吉區濱口町二九二

暑 中 御 伺

暑中御伺申上ます

大阪玉出驛西

喫茶  
洋酒

キング喫茶店

年中無休

電話天下茶屋二五七九番  
麻生葎乃

暑中御伺

各種七カメ

寶

種

徽

旗

章

川柳雜誌社指定

大阪上六加藤旗徽章店

菓子司 菊 壽 堂

御菓子の御用命は是非當店へ

西區住吉橋北詰北  
電話櫻川八二七番

古

本

は

高價に申し受けます。御次第早速参上確實  
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ道入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて隣へ移りました従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入  
電話 南 五 六 二 番

暑中御伺

色紙、短冊の御用は

大阪市南區心齋橋筋二ノ一

(大丸一丁目之辻東入)

川柳雜誌社指定

書畫用品商  
風流雅品商

和正堂

電話 南 二 七 五 一 番  
振替 大阪 九 一 七 五 番

待望久しき「井上劍花坊句集」も愈々豪華の装ひを凝して出版される事になつた。明治、大正、昭和を貫く川柳詩の本流は、此處に光芒を描いて巨人の足跡を燦然たらしめてゐる。現代川柳の眞髓に觸れんとするものの必讀の書としてお奨めしたい。

# 井上劍花坊句集

井上信子編

廣川松五郎裝幀

定 價 參 圓

送 料 市 內 十 六 錢

四六豪華判 四二〇頁

發 行 所 東 京 叢 文 閣

取 次 所

東京市中野區大和町二八二

柳 樽 寺 川 柳 會

振替 東京三三六一番

# 暑 中 御 伺

平泳ぎ戀こは別にふざけてゐ

庄 萬 よ し



◆……阪堺濱寺海水浴場……◆

新阪堺濱寺海水浴に

連日苦熱を忘れる河童連

本社特約店の割引切符大繁昌

大阪市電第一期の九條桑湊間の線路やシベリヤ鐵道の如く芦原の中を走つた新阪堺線が昨秋風水害の損害は致命的だと言はれた難關を突破して見事濱寺公園乗入の宿望を達して六月上旬開通式を行ひ七月七日の海水浴開きには脱衣場ポート、賣店、魚釣り場の設備成り阪和の海水浴場を最南端として南海のそれを中央に北端には新登場の新阪堺海水浴場を以て濱寺公園十丁の設備は東洋一の海水浴場を完成した。途中大和川、大濱、湊濱に貝拾ひ、魚釣り、海水浴の三名所を控へたるは新阪堺の強味で海岸に沿ふ電車はさながら納涼電車の趣きあり「西大阪より近い安、海水浴濱寺へ」乗客は昨年までは見られなかつた繁榮を見せてゐる本社特約割引切符は芦原橋濱寺往復三十三六錢、芦原橋—湊濱往復二十八錢（小人半額）の絶対格安が又非常の人氣を博し、新登場濱寺海水浴としては同業者から驚異の的で見られてゐる。新阪堺往復割引乗車券特約販賣店は各所にある。西大阪市民諸君の御利用を乞ふ。なほ特約店希望の方は本社プレイガイド部へ（電話南六六〇三番）

大 阪 都 民 新 開 社

萬 よ し プ レ イ ガ イ ド

道新  
頓戒  
堀橋

暑 中 御 見 舞

# 弊社の特種設備

高速度式嶄新輪轉機の設備と活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、

活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

## 營業種目

新聞雜誌印刷  
圖書出版引受  
紙型鉛版活字製造販賣  
各種製版印刷  
其他附隨事業一切



社 主 藤 本 卯 之 助

「川柳雜誌」創刊  
以來の印刷所

## 藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番・七七〇番  
振替大阪八二八四番

# 清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴の瓶たまることたまること  
 白鶴へみんな揃ふたい、話  
 い、酒と言へば白鶴持つてくる  
 白鶴を一本つけてからの事  
 百事意の如く白鶴呑んでゐる  
 當選に白鶴樽のままて来る  
 貧乏の中に白鶴だけの味

暑 中 御 伺

攝津灘

嘉納合名會社釀



# アサヒスタウト

## 新發賣

從來スタウトは英國特有のビールにして本邦に於ても御承知の如く同種の製品有之候へども弊社は最も優良なる代表的スタウトの醸造に目標を置き永年特殊原料を精撰して其の醸技に研鑽を重ね來り候結果純正スタウトとして充分其の特質を誇り得る濃厚なる風味と爽快なる香りと獨特の酸味とを有するアサヒスタウトを發賣仕候

アサヒスタウトの品質は新人の嗜好に合致するのみならず豊富なる榮養價を有し健康上最適の飲料に有之候間何卒格別の御聲援御擴賣を賜り度右御披露旁々御願申上候

宮内省御用達

アサヒビール  
エビスビール  
サツボビール  
ユニオンビール

醸造元 大日本麥酒株式會社

# 水顔美びりにと

うせまりを物を出吹きびりに  
うせまりなに麗綺らか地生



▲最も信用あるニキ  
ビ薬・美容劑！  
現代紳士淑女の愛  
物です！  
▲蚊などに刺された  
時にも非常によし！

定 價  
.30  
.50  
1.00

館天順谷桃饅 舗本

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月)一圓一日發行  
昭和十年一月廿五日印刷所本館第十卷六月二日發行

川柳雜誌 (第一三九號)

定價金三拾錢 送料壹錢